013906-000-8

特18-961

橿原宮

大日本国民中学会／編

M45

ABB-0131

特18
961

檀原宮

日本歴史讀本の刊行について

大日本國民中學會に於て日本歴史讀本を著はし、第一編橿原宮より起り毎月一回刊行し二十四冊にて畢らんとす、其旨意を述て曰く、本會に於て一般青年の讀物とすべき書を研究し史書に歸せり、されど市上公刊の歴史多しと雖も事實の穿鑿に忠なるものは乾燥無味の撼あり、氣を負て筆に熱血迸るものは研究に疎なるを免れず、此二短を棄て二長を併せたるを此書の特色とすと、余洵に知る當今の青年は這般の史書を待つ切なり、其刊布さるゝ歡迎する飢食渴飲に比すならん。

歴史の價値は事實にあり、事實の顯象は社會の教俗が事物に觸れて自然に描出されたるものにして、而して之を描いて讀者に感

發興起の情あらしめ、以て趣味を與ふるは文學の力に賴るものとす。明治の文學漸く興りて小說の流行漸く盛んなるや、倫敎により、て意匠を用ゐ、架空の言行を構造して人情義理を感發せしめんと努力したるも、往々不可能的の所爲に陷ゐり、人に興感を與ふる足らず、因て寫實を主としたる自然主義の流行となりたりしが、自然は倫敎に拘束されず、落想自由に社會の情態を構造さるゝを以て、讀者の耳目を掩はしむるの事までも寫實となつて出たれば、聽て社會に厭ひ棄られぬ。畢竟空想によりて構造されたる談は眞の事實に非ざるを以て、自然不自然にかゝはらず人の興感を惹くの力薄きを以て、小說愛讀の思潮は漸々と歷史事實に向ふて、眞の價値を問はんと欲するに奔注したるなり。

構造小說が歷史事實に思想を注がしめたるは、必ずしも明治の文學界にのみ然るに非ず、德川時代も亦然り、彼の落咄は架空にして奇を吐くを主とするも、猶事實を加味したる續きものを出す、講釋は事實によりて敷衍せられ、而して構造の社會談を交へて疲倦を消す、此を以て殊に傾聽さるゝは卽ち歷史の價値なり。演劇も亦然り、其初めは念佛踊りの娛樂より歌舞伎の語り物となり、世話狂言を脚色せしが、聽て時代物の歷史を演ずるに至り、俳優は世話物に巧みなるとも、比較は時代物を巧みなる者に一等地を讓る習例となりたるが如き、並に小說の歷史に及ばざるを證するものとす、本會が靑年の讀物を研究して史書と定められし理由は、近き古今の例を照して動かすべからざる人情自然の傾向なりとす。

是たゞ近き古今に限らざるなり、遠き王代の古へと雖も亦然り、平安朝の初め華洛の貴族間に男女の歷史思想文學思想を喚起し

たるは、伊勢物語大和物語等の歌物語より發達して、源氏物語となり、總て優美なる歌舞の源をたゝへ、而して一方には世物語昔物語の流行となりたり。而も之を宮中に演ずるの順序は、歌物語世物語を前にし、後に昔物語を演ずるを、最も聽くべき物となしたるは、後世の演劇が所作事と世話物を次とし、時代物を重んじたると異なるなし。之を推して降れば、平家物語が太平記となり、而してあらゆる太平記の著はされて、鎌倉室町二代の歴史思想は這般の物語を以て養成されたり。又之を推して遡れば、古事記は語部の物語に原づき著はされたるものにして、奈良朝の萬葉集は歌集にして歌物語を兼ね國學の文學は此兩書を典範となせり。

然りと雖も歴史事實の文學により、物語となりて社會の男女に興感を與へ、以て歴史思想を養ひたる所の効力は是れ歴史の應用

にして、多少文學を以て敷衍せられ、消化せられ、以て興感を左右さる、眞の史學は此にあらず。眞の史學は記錄的の乾燥なる事實にても之を研究し、批評眼を以て判斷力を加へて、自己の智識能力を發展するの學として、他動的に興感を與へらるゝものに非ず。文學の力を以て事實に戰味を生ずるも、史學にては之を受るもあり、又之を破るもあるものとす、譬ば左氏傳に晉人爭舟、舟中之指可掬也とは、群衆が舷に手をかけて舟を乘波めんとするを、刀を以て舷を薙拂ふて舟を推出したる光景をばさながら眼に活躍するが如く書れたり、然るに賴山陽はこれを日本外史の平氏記に變化し用ゐて斷臂滿舷と書たれど摸擬にて實を失へり、舟を爭ふ手を臂より切るは事實にあらず、縱し事實とするも其臂は船を離れて水に浮むべし、史家にして文學の力に倚賴すれば一二句の中にも事實を失

ふ、故に歴史の記錄は乾燥無味なるとも、史家は文筆の外に獨立の思想を存ず、文學の力を以て興感を與ふるは歴史の應用なり、之を通俗の史に用ゐて其歴史思想を喚起すべし、以て史學も此の如きものと誤るなかるべし。

久米邦武

序

日本歴史は我等が祖先の記錄也。我等が有せる此國土と此時代とが、如何にして成立ち、如何にして與へられしかを語るもの也。換言すれば、歴史は實に我等の背景を彩るもの也。我等の歴史を讀まざる可からざる所以のもの、亦多言を要せず。

而して、其處に興亡あり治亂あり、血あり情あり涙あり、その側面は直ちに大なる詩篇を成して、悲史、活史、感興自ら淋漓たるもの無くんばあらず。

此種の著從來既に尠しとせず、されど徒に史實に泥んで乾燥となり無味となれるものに非ずんば、詩興に倚つて史實に嚴正を缺けるもの比々皆然り。史實詩興併せ得たるものを公にせんとして『日本歴史讀本』の編纂は企てられたる也。編者自ら非才を知る、而も其期する所實にこゝに存する也。

第一編『橿原宮』。題して『橿原宮』と云ふと雖も、これ我が建國創業史也。乾坤遼邈の間よりほの〴〵とさし初めたるわが日の本の朝ぼらけ、我が大和民族の誕

生史を經とし、諸冊二神、天照大神、素盞嗚尊、神武天皇、神功皇后、日本武尊等、古代の英雄傳を緯とせるもの也。『三韓征伐』『奈良朝』以下總べて二十四編、編を逐うて續出し、以て、史實を正して信頼し得べき史書たると共に、一大詩篇としての日本歴史を完成せんとす。切に大方の劉覽を待つ。

編者識

橿原宮　目次

一　天地開闢……一
二　伊邪那岐神・伊邪那美神……三
三　三柱の御子……八
四　素盞嗚尊と大日靈貴命……一一
五　天岩戸……一三
六　八岐大蛇……一六
七　素盞嗚尊の殖産……二三
八　國引き……二五
九　大國主命……二六
一〇　素盞嗚尊と大國主命……三一
一一　出雲朝の經營……三六
一二　國ゆづり……三七

一三　大義名分……四六
一四　天孫降臨……四八
一五　木華開耶姫……五三
一六　海の幸・山の幸……五七
一七　神話と歴史――わが建國の理想と精神……六五
一八　上代の風俗……七二
一九　大業恢弘……七六
二〇　皇軍の轉戰……八一
二一　黄金の鵄――饒速日命……九二
二二　人皇第一代……九七
二三　秋津洲……一〇〇
二四　佐井川の畔……一〇二
二五　手研耳命の亂……一〇五
二六　崇神の朝――四道將軍……一〇七
二七　沙本媛皇后……一一三
二八　野見宿禰と田間守……一一九
二九　西邊經略……一二三
三〇　日本武尊……一二七
三一　日高見國……一三四
三二　倭姫命と美夜洲媛……一三六
三三　草薙の劍と弟橘姫……一三九
三四　吾妻はや……一四三
三五　能褒野のつゆ……一四六
三六　成務の御宇……一五三

橿原宮目次終

橿原宮

一、天地開闢

天地開闢、稱して天地開闢と云ふ、何ぞ其語の雄大なるや。實にわが大日本國家の創建は、無限無涯の大規模を以て堂々と成されたる也。

「そのはじめ大宇宙唯漠々として乾坤ひとへに渾沌たり。輕く清めるもの騰りて天となり、重く濁れるもの降りて地となる。かくて「天地初めて發くるの時、高天原に成りませる神は、天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神也。」

と古傳說は傳ふ。「次に國稚く浮脂の如く海月の如く漂へる時、葦芽の如く萌

え騰れるものによりて成りませる神は、宇麻志阿斯詞備比古遲神、天之常立神なり、以上五神は別天津神也。」

其後生れませる神を伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神とす。

天つ神、此二神に詔して、この浮脂の如く、海月の如く漂へる國をつくり固めよと、天の瓊矛を賜ふ。二神、天と地との境なる天の浮橋の上に立ちて見下し玉へば、薄霧の如きもの濛々ととざしこめたる底、仄かにゆら〳〵と漂へる世界あり。二神乃ち天の瓊矛を以て搔き探り玉ひしに、其矛鋒より滴たれる雫凝りて一の島を成せり。之を自凝島といふ。

二神、この島に天降りまし、天の御柱を立てゝ、八尋殿を打ち建て玉ひ、こゝに在して國土の經營をはじめ玉ふ。淡路、伊豫、隱岐、筑紫、壹岐、對島、佐渡及び大倭豐秋津洲は次々にこの二柱の神によりて生み成されぬ、これらを總稱して大八洲國といふ。

浩々として又蕩々たる蒼溟の濤に岸を打たせて、坤輿の極東に連なれるわが日の本の朝ぼらけ、爛漫として色鮮かに咲き亂れたる櫻の花も、未だ明けやらぬ夜の帳の仄紫につゝまれつゝ、打見渡せば霞耶雲耶、干早ふる神代の事はたゞ遼邈として夢にも似たり。さかも光輝あるわが三千年の歴史は、この夢の如き遼邈の間よりかゞやき初めたる也。

二、伊邪那岐神・伊邪那美神

ひとり我邦のみにあらず、いづれの國土にても太古の歴史は神話の連續也。時所を超越し現實界を無視したる神話中の事件は、荒唐無稽、お伽噺より甚だしきあり。されど其中おのづから暗示あり、象徴ありて、おぼろげながら其當時の狀を髣髴せるを見る。

余をしてゝばらく、わが古傳説によりて傳へられたる幾多の神話を叙べし

めよ。わが三千年の歴史はいかにして輝きいでしかを説かしめよ。

伊邪那岐、伊邪那美の二神は多くの國土を生み成し玉ひし後、また多くの神々を生み玉へり。先づ生み玉へるは海の神大綿津見神なり、次に生み玉へるは湊の神神速秋津彦神及び秋津姫神、次に風の神志那津彦神、次に木の神久々能智神、山の神大山津見神、野の神草野姫神、また交通の神石楠船神、食物の神大宜津姫神など生み玉へり。なかるに最後に火の神迦具土神を生み玉ふや、神妃は御腹焼け爛れてみまかり玉ひぬ。男神痛く嘆き玉ひて、「愛しきわが妻よ何故に死せる、子一人を以て汝に易ふ可きや。」と枕元にはらばひ裾邊にはらばひて泣き嘆き玉ふ。其玉なす涙より泣澤女神は生れぬ。されど神妃は蘇り玉はざる也。男神、「汝故にこそ母は死にけれ。」と怒り立ち玉ひ、十拳の劍を拔きて彼の火の神迦具土神の頭を切り落し玉ひしに、さと迸る眞紅の血潮と其刃とより見る〳〵八柱の神ぞ生れいでたる。男神、打驚きて顧み玉へば、不思議や、火の神の骸の頭、胸、腹、手、足、膝などよりもまた八柱の神生れいでたり。かく多くの御兒たち生れ玉ひたれど、一度身まかり玉ひし伊邪那美命は遂によみがへり玉はざりき。

伊邪那岐の尊は戀々の情に堪へさせ玉はず、一眼だに相見ばやと、神妃の後を慕ふて黄泉國に旅立ち玉ひぬ。何億萬里の長程、幾多の險難を冒し玉ひつゝ、遙々と黄泉の國に辿りつけば、城門嚴かに聳えたり。この内にこそ妻はあらんと門内に忍び入り、四邊を覗ひたまふに、折よく戸口に神妃の影す。男神、物狂はしき迄喜び玉ひて、「愛しきわが妻、迎へに來し、われと汝と作りし國未だ作り了へぬを、今一度歸り玉へ。」と云ふ。神妃はじめに驚き、次に喜び、遂には悲みの太息つき玉ひつゝ、「よくも來玉ひしよ、さりや口惜し、時おくれぬ。われは今黄泉竈喰を爲つ、最早再び歸りがたき身ぞ。」と悄然と首を垂れ玉ひぬ。男神胸かき拐らるゝ思ひして、「いかにしても歸りがたき

乎、さる事あらんや、いかでさる事あらんや。」と苛ち玉ふに、神妃、「われもい
かにもして歸らばやと思ふなり、此國の神達に議り見ん程にあばし待ちて在
せ、ゆめ、城の内を覗き玉ふ勿れ。」と云ひ捨てゝ内に入りぬ。
やがてあたり暗くなりて、いづくよりか冷たき腥き風吹き來。男神心細く
なり玉ひ、堅き誓ひをも打忘れ、櫛の齒一つ缺き火を點して炬としつ、城の
奥深く忍び入り、とある室の中を覗き玉ひしに、炬の火の打ちゆらゝめく影
に浮びて怪しきものあり。近よりて見玉へばこは何の狀ぞ、輝くばかり美し
かりし女神、蛆集り膿とろゝめく身を横へてあり、頭には火雷、腹には黑雷、
臍には折雷、左の手には若雷、右の手には土雷、左の足には鳴雷、右の足に
伏雷、すべて八の雷炎を吐きて之をまもれる也。男神、驚きふためき、慌て
まどひて逃げんとする時、神妃はじめて覺め玉ひつ、「堅き誓を破り玉ひ、斯
くはづかしき姿を見玉ひし哉。」と激しく恨み怒り玉ひ、黄泉醜女をして御

跡を追はしめ玉ふ。黄泉醜女は女の鬼共なり、忽ち男神に追ひ迫りて捕へん
とす、男神心も空に走りつゝ髮にかけし黑御鬘を後方に投げ玉へば、そこに
倏忽蒲子の實なりいでたり。醜女共爭ひて其實を貪れる隙に、男神やゝ逃げ
のび玉ひしが醜女共また追ひ迫る。男神、鬢に挿し玉へる櫛を投げ玉ひしに
筍となりぬ、醜女共、また爭ふて夫を貪れる隙に男神また稍々逃げのび玉ひ
しが、此度は、彼の火雷、土雷、黑雷等の八雷の神、千五百之黄泉軍を打ち
從へて疾風の如く追來たりぬ。男神乃ち腰なる十拳の劍を拔き後方に向けて
ふりまはしつゝ、息も絶えぐに逃げのびて、出雲の國の黄泉比良坂の下ま
で來ぬ。こゝに一本の桃實れり、男神、其實を三つ四つ摘みとり玉ひ、追手
の方に抛ち玉へばかの雷共皆退きて空の彼方にかききえぬ。男神ほつと息つ
き玉ひ、彼の桃の木を撫でゝ其勳功を賞し、「うつくしき蒼生の苦瀨におちて
くるしまん時、汝今日我に爲りし如く爲よ。」と宣ひて、此桃に意富加美豆美

命といふ名を賜ひけり。

さかるに此時又彼方よりとゞろ〳〵に地踏み鳴らして來るものあり、伊邪那美神自から追ひ來玉ひし也。男神再び打ち驚き傍の山に登りて千引の石を抱え出し、ひたと黄泉比良坂の口を塞ぎぬ。神妃、いかんともするを得ず、口惜しがりて地たゞら踏みつゝ、「愛しきわが那勢の命、そのむくひには汝の國の蒼生、一日に千人絞り殺さん。」と叫び玉ふ。男神、「何かおそれん、愛しきわが妻よ、われは一日に千五百の産屋をこそ建てめ。」と答へ玉ひぬ。

かくて男神女神の縁全くたえ、ゆるぎ無き千引の岩は、黄泉國との往來の門を永久に鎖したり。

三、三柱の御子

伊邪那岐神は辛うじて黄泉國の危難より脱し玉ひしが、かの穢き國の空氣に觸れて御身汚れたれば、はらひをなし玉はんとて、筑紫の國日向の橘の小門の檍原に到りまして、かの汚れに染みし旅の裝束をとり放ち給ひしが、脱ぎすて玉へる杖、帶、冠、褌、鞋、御衣、左右の手纏などより十二の神生れたり。また洗ひ落せる其垢より、八十禍日神、大禍日神生れたり、世の中の一切の凶事は皆此神の所爲なり。御體清まりし時に、神直毘神、大直日神、伊豆能賣神生れたり。これ禍を直す神なり。

斯くて、あらゆる汚穢と垢膩とを跡も無く濺ぎ落し、御心爽かになりし時、更に左の眼を洗ひ玉ひしに、靈光さし出でゝいと麗はしき女神生れぬ。これ即ち大日靈貴神也。次に右の眼を洗ひ玉ひしに、又靈光さし出でゝ男神生れぬ、これ月讀の神也。次に鼻を洗ひ玉ひしに男神生れぬ、これ建速素蓋嗚神也。

「われ多くの子を生めり。さかも此三柱ほど貴きはあらず。」とのたまひて、

その三柱の子を見玉ふに、いづれも貴きが中に、殊に大日靈貴神は、光華明彩、天地に照り徹り玉ひ一きは氣高く在しければ、これはこゝに留めおく可きにあらずと思召し、おん頸の玉をはづして、女神のおん頸にかけ玉ひしに、玉は相觸れて琅々となりぬ。

かくて、伊邪那岐尊は、大日靈貴神には高天原を治めしめ玉ふ。月讀の神には夜食國を治めしめ玉ふ。素盞嗚神には蒼海を治めしめたまふ。

第一第二の神は正しく直く伊邪那岐尊の詔に從ひよく國土を治め玉ひしが、素盞嗚神はひとり命に從ひ玉はざる事多かりき。此神、年長じて八束髯胸に至る迄も啼泣し、其啼き玉ふや、青山を枯山となすまでに泣き枯らし、河海は悉く泣き乾したりといふにても、いかに激しき感情の兒に在せしかを想見すべし。此感情のゆくがまに〳〵振舞ひ玉ひつ、すこしも國事をかへりみ玉はねば、蒼蠅なす惡神共競ひ起りて國内亂れに亂れたり。父の神怒り玉ひて、

「何故に泣くや。」と責め玉ひしに尊、「妣の國根の國に罷らんと思ふが故に泣く。」と答ふ。父の神大にいかり玉ひ、「さらば汝、この國に住む事勿れ。」とて遂に根の國に追ひやらひ玉ひぬ。

四、素盞嗚尊と大日靈貴命

素盞嗚尊、さらば姉大日靈貴命に見えて然る後に行かんとて、霧を踏み雲を蹴つて天高原に昇りたまふや、地震の如く暴風の如く、波ひるがへり山轟くばかりのおん勢ひいとすさまじく聞えければ、大神、「かれの來る、必らずよき心ならじ、わが國を奪はんと欲する乎。」とて、乃ち髮を結びて髻となし、裳を纏うて袴となし、八坂瓊の御統を以て其髻鬘と腕とにまとひ、弓矢とり太刀はきて待ちたまふ。光明赫耀、麗はしき女神の勇ましき大丈夫ぶりのおん裝の、いかに嚴かにも映ゆかりけん。

「よき心にあらじ、何故に來つるぞ。」

「決して邪き心あるにあらず、父母の神に追はれて根の國に行くべき道すがらを、一度姉大神にまみえ奉らんとてぞ。」とおもひの外に打ち萎れたる樣にて答へたまふ。されど姉大神はたやすく信じたまはず、さらば何を以て汝の明き心を知るべきと仰せ玉ひければ、誓約をして子を生むべし、若し男子を生まばわが心の赤きを知り玉ふべけんとて、尊四柱の御子をうませ玉ひしに皆男子なり。尊、「わが心清し、われ勝ちぬ。」と打誇り玉ひけるが、猛々しくもまた無邪氣なる尊は、勝ちすさびたる御心のまに〳〵、再び暴戻の行多くなりぬ。或は大神の御領なる田の畔を毀ちて其境界を亂し、その溝を埋めて水利を妨げ、或は大神の新嘗の宮殿をけがしなどしたまふ。

されど慈愛深き大神ははじめの程は少しも咎めたまはず、田の畔を毀ち溝を埋めしは空地あらせじとてなり、愛しき弟のいかなれば斯かる事をせん、彼の汚きは酒に醉ひて吐きちらせるにこそ、わが愛しき弟よ、さあらずて汝いかでさる邪き事をなけんと見直し聞き直しゝたまひしが、止む事もなき尊の惡行はます〳〵募り行きつ、大御神の自ら天神に捧ぐる神衣を織らんとて忌織殿に居らせ玉ひける時、其殿の棟を穿ちて、天斑駒を逆剝ぎにして投げ入るゝが如き亂暴を敢てなたまひしかば、大御神今は堪へ玉はず、天岩屋に入りたまひ、その戸を閉ぢてさしこもり玉ひぬ。

五、天岩戸

大日靈貴命かくれ玉ひて、天地は闇黑となりぬ、闇にすくへる邪神の群は蝙蝠の如く舞ひいでゝ、黑き笑ひに世を呪ふ妖魔、今を時ぞと横行す。さまよひ惑へる八百萬の神々は、天安河原に神集につどひて、さま〳〵に議り合ひぬ。時に高皇産靈の神の御子に思兼神といふがおはしき、思慮萬神に勝

れ玉ひければ、神々思兼神に思はしめて、日神を出し奉る方法を講ず。思兼神は先づ長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かしめ、天兒屋命、太玉命をして天香具山の五百箇の眞坂樹を掘りとらしめ、その上枝には、玉祖命に科せてつくらしめし八尺曲玉の五百津御統をかけ、その中枝には、石凝姥命に科せてつくらしめし八咫鏡をかけ、その下枝には、白和幣青和幣を懸け、太玉命これを持たし、天兒屋命聲ほがら〳〵と節面白く大諄辭を禱き白しつ、又天手力男命に命じて御戸の脇に隱れ立たしめ、天鈿女命には天香具山なる蘿を手繦にかけ、手に茅卷の矛を持ち、斧火焚き、槽を覆せて、その上に立ちて舞はしめしけるに、命胸も露はに裳の紐をさへおし垂れて舞ひ狂ひたまへりしかば、八百萬の神達諸聲合せて高く打ち笑ひ、高天原搖るぎいでなんとするばかり也。

大神、たゞ額をあつめて憂に沈みてあらむと思し玉ひし八百萬の神共の、思ひの外なる此歡喜の聲をきゝ玉ひ、怪しき事に思して戸を細目にあけ、何事ぞと問ひ玉ふ。鈿女命答へて、大神にまさりて尊き神現はれませるが故によろこべる也と申す、かく申すうちに、兒屋、大玉の二神かの御鏡を示し奉りしに、大神おん自らの姿の鏡に寫れるを見て夫とは氣づき玉はず、いよいよあやしと思し玉ひて半歩ばかり戸を出でゝ覗ひ見玉はんとする時、待ち搆へたる手力男命、つとおん手を執り奉るや、名にし負ふ手力をもて強ひて引き出し奉りぬ。

常闇の世はかくて明け放れぬ、新しき光輝の中に萬物再びよみがへりて、邪神も妖魔も消えて影を止めず。群神相共にうたふて曰く、あはれ、あなおもしろ、あなたぬし、あなさやけ、おけ――。

斯く大神の御怒とけて萬物の憂消えしは思兼命の御力なり、後の學者此命を仰ぎて學祖となせり。

こゝに於て、八百萬の神々再び議して、素盞嗚尊に贖罪を命じ、手足の爪

を拔かしめていよ〳〵根の國に追ひやらふ事となりぬ。

六、八岐大蛇

素盞嗚尊ははげしき感情の兒、炎々として燃ゆるが如き胸の火の、他を焚くにあらずんば自ら焚く狂熱の兒、又常に何物にか憧憬れ渡りてはゐばらくも現在に安んずる能はざる一種詩人的天才的の性格にておはしけん。いたましき哉、今は身を寄する處もなく、果知らぬ漂浪の旅に上らんとする也。別るゝとて姉大神に見え、告げて曰く、「衆神われを根の國に追放し玉ふ、われは遂に歸らざる可し、けふ別れまつらば復た逢ふを得じ、請ふ、姉尊よ永久にさきくませ、榮多くおはせ。」と、今はなか〳〵に別れがたなく見え玉ふ、時に雨ふりつゞきしかば、青草を結び束ねて簑笠とし、孤影悄然高天原をたちいで玉びぬ。すさび立ちては暴風の如く地震の如し、打ち萎れては、もと

より情緒可憐しき此神、後髪引かるゝ一歩毎に哀別の涙しきりなり。

尊は斯くて高天原を追はれて新羅の國に下り、尊尸茂利の地に至りたまひぬ。わが朝鮮は此時において、已にわが殖民地となりけるなり。

されど、尊は長く此地に在るを好みたまはず、埴土を以て船を作り、之に乘つて出雲の國につき玉ひ、簸の川上なる鳥上峯に到りませり。今の仁多郡、伯耆の國と堺せるところ也。

いづくに行かばわが住む可き地はあらん、いづくに行きても尊が胸の空虛は滿たされざりき。西に東にさすらひの夢を重ねて、櫛風沐雨の苦みにやつれさせ玉ひし身の、今又獨り此途もなき深山の奥をあてもなくさまよふ尊の心やいかなりし。魂や〳〵もすれば斷崖の危きに悄し、神はいく度岩走る瀧津瀨と共に碎く。さすがに猛き御心にも感じ傷む事しげくおはせしなる可し。

と行き、かく行きして流れに踞し水など掬び上げ玉ふ程に、川上より流れ來

るものあり、とりて見玉へば箸なりけり。あやしやかゝる山奥に住む人もありけるよと、あはれにも懐かしく思しやり玉ひ、尊は水のまに〳〵上り行き玉ひぬ。山は愈々深く、谷はいよ〳〵迫れり、怪禽の叫び折々木精に響きて、原始の幽谷は物凄きまで静かなり。尊はたゞ此箸をたよりに、いかなる人か住むらんと急ぎに急ぎ玉ふ程に、この川に添ひて立ちたる賤の樞ありけり。近づき玉へば、何事ぞや人の泣く聲す。樞の隙より差のぞき玉へば、老翁と老媼とが少女を中に据ゑかき撫でつゝ泣き嘆ける也。尊ます〳〵怪み玉ひ、汝は誰ぞ、いかなれば泣くやと問ひ玉ふ。思ひがけなき旅人の聲に驚きし老翁は涙押拭ひつゝ申すやう、「われは國神大山津見神の子、わが名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田姫と云ふ。われさきに八女ありしが、毎年越の國より來る八岐の大蛇の爲に呑まれ、今はたゞ此女一人殘れるをも、今夜また將に呑まれんとす、免がるゝ術なければ斯くは泣く也。」命問ひ玉ふ、「憎き大蛇が振舞かな、その八岐の大蛇てふはいかなる狀をなせる。」足名椎「さらば也、彼が眼は酸漿の如く赤く、體は一なれど八の頭と八の尾とあり、體には蘿檜榲など生ひ茂り、その長さは谷八谷峽八峽に亘りて、その腹はいつも唐紅に血爛れたり。」と答ふる聲も打戦きつ、老いたる二人は恐怖と悲哀とにとり亂して泣く。少女も打伏してよゝと打ち泣けり。尊あはれに思し、ゐばらく打案じておはせしが、「われに良計こそあれ、今宵彼の大蛇を悉く斬り屠る可し、おそるゝ勿れ。」と慰め玉ふ。老夫婦は此御言葉に覺えず躍り上りて喜べば、少女もいかなる人かわれを救ひ玉ふと、亂れたる髪かき撫でつゝ、涙乾き合へぬ瞳に歡喜の色を泚えて、はづかしげに尊をうちまもりぬ。

「汝等は八鹽折の酒を釀す可し、また八の垣を作りてこゝに結ひ廻はし、その垣毎に八の門を作り、その門毎に八の假床を結び、その假床毎に酒槽を置き、其酒槽毎にかの八鹽折の酒を盛りて待つべし。」と命じたまへば、老夫婦

はかしこみて命の如くす。かくて、尊は彼の少女を此家の奥に隠し、御自ら彼の酒槽の下に立ちて、今や來ると待ちかまへ玉ふ。

草木も眠り、水流の音のみすみ渡る夜半の頃なり、そこともしれぬ一陣の腥風さまよひ來ぬと思ふ程に、遠く海嘯の鳴る如き響す、やがて暴風の吹き來る如きけはひす、つひには地震の搖り來し如く、山も轟くばかりの音して近づくものあり。尊は十握の劍の欄をかと握り腕さすりて待ち玉ふに、げにや八岐の大蛇とは是乎。たとへば流星の如き光の闇に爛々と輝き續けるは其十六の眼也、暗き空を紅に隈どれるは炎を吹ける也。黄なる燐青き燐の爪かに燃ゆるにも似たる鱗をうごめかして、さわ〳〵とのたくり來る狀のすさまじとも怖ろしとも云ふばかり無し。いかにするかと見てあれば、かの酒槽の下に來りて、と見、斯う見して居たりしが、其の甘き香にやそゝられけむ、八の槽に八の頭さして舌打ちひたして貪り飲む。今は飲み果てたりと思ふ頃、その醉進みしとおぼしくやう〳〵眠氣催せるさま也。尊は斬らん〳〵と御心苛ちておはしたまふ中に、大蛇、遂に正體もなく醉ひ倒れげり。尊乃ち走りいで、欄も透れと三太刀四太刀斬り玉ふ。痛手に覺めたる大蛇は八の頭振り立て、八の尾打揮ひ、もがき狂うて尊に躍り蒐らんとす。尊は飛鳥の如くと び上り飛び下り、背に乘り腹を潜り、突き斬り、さし透しあたまふ程に、大蛇遂に力盡きて倒れけり、其血流れて簸の川の波唐紅の色に染まりぬ。前より垣の邊に彳みて、手に汗握りてゐたりし老夫婦も、小さき胸轟かし身も悶えつゝ打ちまもり居し少女も、此狀を見るより走り寄り、尊の袖に取りすがりて讃へ喜ぶ事かぎり無し。

尊尚ほ飽かず思しければ、其尾どもをずだ〳〵に斬り裂き玉ひしに、中の尾に至つて双少しく缺けたり。あやしみて其尾を割き見れば一劍あり。尊喜びて曰く、「これ名劍也、私有すべきにあらず。」と、其狀を具して高天原なる

姉の尊に献じ玉ひぬ。見よ、尊が姉の尊を思ふ御心のいかに厚かりしぞ、つれなくも追ひ放たれし高天原の地に、尊はなほ戀々として思慕の情を寄せ玉ふなり。

かくて此寶劍は此時以來今に傳はり、實に日本帝國の神器となりぬ。天叢雲の劍と申すはこれ也。

英雄と美人と大蛇と、此神話のいかに劇的の色彩に富めるかよ。或は解して、此八岐の大蛇は越國地方より襲來する强盛なる異人種、即ち蝦夷の事也と、或は然らん、されど强ひて其事實を詮鑿するを止めて、まづ此原始の幽谷を背景とし、此多恨薄命の英雄を主人公とせる美しき夢幻劇の一場を想像せよ、あかも尊は此危難を救ひ得て、その少女櫛名田姫を娶り、その父母なる手名椎、足名椎をも伴ひて、此處を立ちいで、地を相して宮つくりし、出雲朝の起原こゝにひらけしを思へば、此神話がわが建國史中、極めて重大なる位置を有せる事を忘るべからざるなり。

尊が宮作りしたまひしは須賀といふ地なりき。わが心こゝに來ていと清々しとのたまひけるによりて此名おこる。尊が長き放浪はこゝに終り、和樂なる家庭の人となり玉ひぬ。其宮作りしたまひし時、其地より村雲たちのぼりて垣の如く見えしかば、尊うたうて曰く

やくもたつ、いづもやへがき、つまごめに、
やへがきつくる、その八重垣を。

これわが國の歌のはじめ也。げにや最も勇猛なる此神は、最も優美なる性質を有し玉へりき。猛々しくも荒々しき此神の、戀には脆き歌のやさしさ、その一面のいかに眞率に純情におはせしかよ。

七、素盞嗚尊の殖産

此美しき一節の神話によりて出雲朝は創りぬ。

素盞嗚尊、さきに高天原を追はるゝ時、食を大宜都姫の神に乞ひ玉ふや、大宜都姫の神、鼻口などより種々の食物をとり出でゝ奉る。尊見て以て穢しとし、大宜都姫の神を打ち殺し玉ひしに、其殺されし大宜都姫の神の身に種種のもの生れり。頭には蠶、兩眼には稻、兩耳には粟、鼻には小豆、其他の岐體より麥大豆等生れりといふ面白き傳說あり。以て尊が利用厚生の途に意を用ひ玉ひしを見る可し。御子に大年の神あり、宇加の御魂と申すあり、大年とは穀物收穫の大を形容せる言葉にして、宇迦とは食物の義なり。されば この名を負ひ玉へる御子達も、必らずや又父の尊の志を繼ぎて農事に盡し玉ひしならん。又素盞嗚尊新羅より歸り玉ふ時曰く、「韓國の島は金銀ありといへども、わが兒の御らする國は浮寶有らざられば宜しからず」とて、乃ち鬚髯を拔きて之をわかてば杉となり、胸毛をぬきてこれをわかてば檜となり、尻の毛は槇となり、眉の毛は櫟樟となれり。なほ其用途を定めて、「杉及び櫟樟は以て浮寶となす可く、檜は以て瑞宮をつくるの材となす可く、槇は顯見蒼生の奥津棄戸に持ち臥さん具とすべし。」とおほせ玉ひしと傳ふるを見ても、尊が生產の道に御心を用ひ玉ひしは明かなり。其他御子に五十猛神、大屋津姫の命、播津姫命などおはしけるが、皆山林の事に力をつくし、樹種を分布し玉へり。此三神は紀伊の熊野にまつれる神々にして、紀伊國とは即ち木の國の謂なり。

素盞嗚尊及其御子の神々の功業かくの如く大なりければ、其勢次第に盛となり、出雲を中心として漸々四方に及びぬ。

八、國引き

素盞嗚尊四世の孫に八束水臣津野神といへる神ありき。出雲國の經營に最

も力を盡し玉ひし神也。

この國は初國小さく作られしとて、國引きなして擴めんとし、いづくにか國の餘りなきかと、海岸の巖の上に立ちて西の方を見玉へば、碧瀾紫濤漫々と打ちけぶれる彼方に新羅の岬見ゆ。かの國にこそ餘りはありけれ、いで曳き寄せんと其岬に三糾の太繩打掛けて、えい〳〵と手操りよせ曳きよせ縫ひ合はせ玉ひしが彼の杵築の岬なり、その綱を繫げる杙が即ち三瓶山にして、其綱が薗の長濱なりといふ。次に北の方を見渡せばまた廣き國原見ゆ。又繩打掛けて引寄せ玉ひしが今の牡鹿郡也。かくて今の出雲國は成れりといふ。偉大なる哉、此國引の企てや、これ勇武剛健にして進取の氣に充ちたるわが建國の大精神を象徵せるものにあらざるか。

九、大國主命

素盞嗚尊六世の孫に大國主命といふ神あり。大穴弁遲神、葦原醜男神、八千矛神、顯國玉神などの別稱あり。その頃、名は自ら命ずる事なく、多くは其〳〵の偉業威德を稱して他より命ずるが常なりき。されば名は直に其持主を說明す。八千矛は武勇を稱する言葉なり。醜男もしかり、葦原醜男と云へるは猶日本猛士といふが如し。顯國玉は此國を經營し玉へる功德を稱し、大國主は此國の統領主宰といふほどの意なり。さて大穴弁遲は斯く數多の名を持ち玉へるを稱す。以ていかに此神の偉大なる神にておはせしかを知る可し。

此神の生涯も亦面白き傳說に富めり。

此神には異母の兄達いと多く、之を八十神と云ひき。八十神皆腹黑く心拗けたり、直く柔しき此命を虐たぐる事のみ多し。

因幡の國に八上姫といへる美人あり、八十神、われこそは得めと打競ひつつ、打連れて出で行きしに、命をば從者となし袋を負はせたり。袋の重きに

喘ぎつゝ、歩み遲れし命をば打捨てゝ、八十神達罵り興じ乍ら因幡の國にさしかゝりし時、路傍に一匹の赤膚の裸兎寒さに慄ひ居しを見て、「寒からん、よき術教へん。先づ海に入りて潮を浴びて來よ、而して岩端に立ちて海の風に吹かれよ、心地清々しくなりて柔き毛忽ち生え出でん。」と口々に欺く。兎は八十神に教へられし如くしけるに、潮水の乾くと共に、膚裂け血滲みて痛き事いふばかりなければ、轉輾反側、聲もかれ〳〵に泣き叫び居たり。遲れて其處にさしかゝれる大國主命、「何故に泣くぞ。」と問ふ。兎、戰く聲打激ましく〳〵語るやう、「われはもと因幡の者なり、一年洪水に逢ひて棲み居たる竹籔と共に隱岐の島に流されしが、いかにもして故郷に歸らばやと海の鰐共を欺きつゝわれと汝といづれか眷族多き、較べ見ずやと云ひしに鰐數多の眷族を伴ひ來りぬ。さらば。此岸より彼方の岬迄背を連ねよ、われ其上を飛びつつ數へんとて、其上を飛びこえ〳〵遂に此地に著きたり。著かんとする時、あはれ愚かなる！いつはられし可笑しさよと嘲けりしに、鰐怒りてわれを捕へ、遂にかくわが衣を引拂りぬ。あかるに又八十神達に弄ばれてかく痛き目を見るなり。」大國主命あはれに思して、「河に入りて其潮を洗ひ落し、蒲の穗を集めて其中にねて居よ、さらば痛去り柔かき美しき毛生えいづ可し。」と教へ玉ふ。兎命の如くせしに、忽ち痛み癒え毛生えたり。兎躍り上りはね廻りつゝ打喜び、「意地惡き八十神達、いかで彼の姫を得ん、此神こそかの美しき姫を得玉ふべけれ。」と申して去りけり。

兎の豫言は違はざりき。

美しくさがしき八上姫の眼は、彼のきらびやかに着飾りし八十神達をばかへりみもせず、袋を負ひて詑びしげに從へる大國主命を熱心にうちまもる也。

八十神、さらぬだに憎しと思ひしに、加ふるに此戀の恨、遂に相謀りて命を殺さんとし、伯耆の國の手間の山本にいたりし時、「此山に赤き猪すめり、

われ等頂に上ぼりて追ひ下ろすべし、汝此處に待ちて捕へよ。若し捕へ得ずば、われ等汝を殺さん。」と云ひて頂に上る。大國主命、餘りに非道なる兄神達の命令哉と思ひ玉ひけれど、もとより勇武の神也、何かあらんやと心を激まして山下に待ち居玉ふ。やがて猪、すさまじき音立てゝ頂上より轉び來しかば、いかで免さんやと抱きつき玉ひしに、そは猪に非ず、火にて燒ける大石なりければ、命全身を燒爛ちかされてたちまち息打ち絶えぬ。母神若比賣命、急ぎ來て此狀を見、哭き憂ふる事一方ならず、天神に祈りて藥を得、心を盡して介抱しければ、辛うじて蘇生し玉ひぬ。

八十神、再び命を欺きて、山深く誘ひ入れ、大木を切り伏せて縱に割り、楔を鍬めて木口を押擴げ、命を其中に入れて楔をとりはづしければ、命板の如く打ちひしがれ聲も立て得ず息絶えたり。母神、此事を聞き哭く〳〵死骸を探し出し、あはれ天神、今一度吾子が命活けしめ玉へと一心不亂に念じ玉ひければ、また辛うじて息吹きかへせり。

母命、大國主命に曰く、「汝薄命の子よ、かくあらば彼の兄達遂に汝を殺し果つ可し、ちばらく紀伊國の大毘古神の許に行きて身を託せよ。」とて逃がし玉ふ。

八十神、これを知り、いかで逃がさんと執念くも其あとを追ひかけ、弓に矢を番へて射る事連りなり。命、道の傍なる大樹の蔭に身をそばめて、危き難を免れて遁げのび玉ふ。母命、更に曰く、「今は汝、速に根の國へ行け、そこには遠祖素盞嗚尊おはします、惡しくはばからひ玉ふまじ、疾く行きてその庇によれ。」と、涙ながらに旅立たし玉ふ。

かくて大國主命は、はる〳〵と根の國の空さして辿り行く。

一〇、素盞嗚尊と大國主命

根の國に在せる素盞嗚尊には一人の美しき女ありき、須世理媛と申す。須世理媛、一日城門の邊を逍遙しつゝ、夕雲遠き物思ひに耽りゐたまひしに、はしなくも一人の見馴れぬ神訪れ來ぬ。旅の姿見るかげもなく窶れたれど、秀麗の眉目世にいみじき丈夫也、少女の心忽ち動きて曙色の頰の火照、愛慕の情胸に餘りて見え玉ひしが、此神もはた此少女のらうたき樣に心殘し玉ひけり。此神は即ち大國主命也。かくて命は須勢理媛と夫婦になり玉ひつ、御心安しと思し玉ふ隙もなく、あはれ又こゝにも艱難辛苦の數多かりき。

素盞嗚尊はいかなる御心なりけむ、大國主命をして、蛇の室屋といふに臥さしめ玉ふ。この室には、幾百千の蛇のたくりわだかまりて、ともすれば這ひまつはり、喰ひさゝんとす。媛窃に難除の蛇の領巾と云へるを命に授け、「蛇出でゝもし螫まんとなさば、此領巾を三度ふり玉へ。」と敎ふ。命その如くせしかば果して難を免れ得たり。

次の夜はまた、蜈蚣と蜂との室屋に臥さしめられぬ。媛また、蜈蚣と蜂との領巾を命に授けければまた免かれたり。

是に於て、素盞嗚尊は、命を大野に誘ひ出し、鳴鏑の矢を射放ちて、命に其矢を拾ひ來よと命ず。命走り行きて拾はんとせし時、尊、四方より火を放ちて其野を燒き廻らし玉ふ。火は燃え迫りて袖焦げ髮燒けんとす。今は早や免るゝ術も無し、其時命の脚下に一匹の鼠現はれ其爪先をかみつゝ、「内はほらほら、外はすぶ〳〵。」とつぶやく。命乃ち强く其處を踏み玉ひしに、豁然として穴明け、鼠と共におちいりぬ。炎は頭の上を燃えて危く難を遁れたり。やがて彼の鼠、彼の鏑矢を咋へ來て命に獻ず、其羽は嚙み去られてありき。命大によろこび其矢をさゝげて歸らんとせしに、已に命は燒死に玉へりとおぼし、喪具を持ちてなく〳〵たづね來し媛と會ひぬ。

媛は夢かとばかりに打ちよろこびたまひ、父の尊は舌を卷いて驚き嘆じ玉ふ。

素盞嗚尊、尚も懲らし見んとて、此度は八田間の室屋といふに入らしめ、おん自ら其處に横はり玉ひて、その頭髮の虱をとれと命じ玉ふ。命、かしこまりてとらんとせしに、頭髮の中には蜈蚣數多すくひてうごめけり。時に媛、椋木の實と赤土とを命に授けて、「わが君、是を咋ひ破りて唾出しませ。」と敎へければ、その如くなし玉ひしに、尊蜈蚣を咋ひ破れりと思して、窃にその武勇に感じ玉ひけり。

大國主命、こゝもわが爲に安き地ならずと思ひければ、尊のうと〳〵ねむり入り玉ひし隙に、須世理媛とはかりて、尊の頭髮を室の椽に卷きつけ、五百引の岩もて室の戸を取り塞へ置きつ、生太刀、生弓矢、天詔琴といふ三種の寶を持ちて媛と共に窃かに逃げ出し玉ひしが、其時、天詔琴、樹の枝に觸れて高く鳴れり。尊其音に驚き覺め玉ひ、起き上らんとあせれども、髮の毛椽に結ばれて身動きさへも叶ひ玉はず――。

命と媛と出雲國黃泉比良坂迄落ち玉ひし時、素盞嗚尊の御聲幽かに後より聞ゆ。「その汝が持てる生太刀、生弓矢は其連れたりしわがむすめと共にその儘汝に與ふ可し。汝そを以てかの八十神をば、坂の尾毎に追伏せ、河の瀨毎に追拂ひ、葦原中國を打ちしたがへよ。」

げに、素盞嗚尊のかく命を苦しめ惱まし玉ひしは、先づ命の器量を試みんとてなりしなり。

赤猪の難、大木の難、蛇、蜈蚣の難、野の火の難、これ等幾多の難は、實に命をして他日名にし負ふ大國主命たらしむる爲めの試錬たりし也。艱難汝を玉にす。此平凡なる一語の、千早なる神代の昔に於て、すでに此好例證を有したるを見よ。

一一、出雲朝の經營

生太刀、生弓矢、天詔琴、此等はげにいみじき寶なりけり。太刀と弓矢とは、彼の暴戾なる八十神達を追ひ伏せたり。詔琴の調はよく國政を調へて、出雲朝の勢力は此神の御世に至りて其強盛を極めぬ。――はじめて此世界を生み玉ひしは伊弉那岐・伊弉那美の二神、はじめて此日本の大部分を堅め治め玉ひしは大國主神なり。されば前の二神を國生みの神と稱し、この神をば國作りの神と世に稱す。

大國主命、國々を巡廻して出雲の御大の岬に到りませし時、渺々として限りも知らぬ青海原、たそがれそめし波の薄銀色に飜る間を、見えつ隱れつ漂ひ來る船あり。何處のいかなる者ぞと打ちまもり玉ふほどに、船はやう〳〵汀につきたり。さゝやかなる船也。中には鷺の皮を剝ぎて衣とせる小男あり、名を問へど答へず、國を問へど答へず。互に顏見合せてありしが、こゝに物しりの翁來りて、こは神皇靈神の御子、少名彦神なりと申す。大國主神、大に喜び玉ひ、兄弟となりて共に此國の經營にいそしみ玉ひぬ。

かくて兩神、智勇を合せて國々を治め、醫藥の法、禁厭の法を定めて、病氣を癒やし災禍をはらひ、且つ農蠶の道を敎へ玉ひければ、國土日を追うて開け行けり。後に少名彦命は熊野の岬より、再び船に乘りて去りぬ。いづくにか行きけん、滄溟茫々、杳としてまた其行方を知らず。

一二、國ゆづり

大國主命の苦心經營によりて、出雲附近は平らかに安らかに治まりたれど、其他の國々島々にはなほ邪神横行して、騷擾やむ時なかりき。

此時、高天原に照臨ましませる天照大神、おごそかに宣り玉ひて、

「彼の豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗の國は、わが子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の治ろす可き國なり。」とて、御子天忍穗耳命を降し玉はんとす。

天忍穗耳命、まづ天地の通路なる天の浮橋に立ちて下界の狀を見玉ひ、歸り上りてその騷擾はなはだしく、草木岩石皆おのがじし聲をあげて罵りあへる旨を奏す。

大神乃ち高皇產靈神と謀り、天安河原に八百萬神を集へて評議せしめ玉ふ。いかにしてかの中國を平定す可きか、何人を遣はすべきか、智謀第一の思兼の命、思ひはかりて忍穗耳命の御弟天帆日命を派遣して偵察せしむる事となりぬ。

天帆日命は大命をかしこみ、直ちに中國に降りしが、大國主命の威光盛なるに壓服せられ使命を棄てゝ媚附せしか、あるひは又徐に機をうかゞひて名分を說かんとせしか、其儘出雲朝に仕へて、二年また三年、荏苒遂にかへらず。

待てど〳〵、天帆日命の消息無し。再び高天原の會議は開かれぬ。此度撰に當れるは天津國主神の子天若日子なり、大神、もし命に從はずんば武力を以て打ちしたがへよとて、若日子に賜ふに天の鹿兒弓と天の波々矢とを以てす。天若日子、この名譽なる征討の將軍を承り、勇みたちて出雲國に降りしが、亦、侮る可からざる大國主命の勢にけおされて、さては自ら其後を得て此國の主とならんといふ野心さへ起りつゝ、さま〳〵に言ひよりて遂に大國主神の女、下照姫を娶りて此地にすみつき、また天上にかへらんともせず。

いかにしけん、若日子も亦歸らず、待つ事八年になれどもついに歸らず。是に天上にては第三回の會議をひらき、名鳴女といふ雉子に命じ、つかはして若日子の怠慢を責めしむ。名鳴女は風をきり雲を衝いてとび降り、彼方此方を尋ねまはりし末、若日子の住める家の門前の大楓の梢にとまりて大神の

命を傳へぬ。「若日子よ、汝を此中國につかはされしは、速かに平定の功を奏して復命せよとて也、何故にかくはたゞにありつる。」

若日子の侍婢、これをきゝしが其言葉を解せず、「見馴れぬ鳥の鳴聲かな、凶鳥にこそあれ、とく射殺し玉へ。」とすゝむ。若日子乃ち弓に矢を番へ、狙ひすまして兵と射放つ。矢はあやまたず雉子の胸を射貫き、餘勢虚空に鳴りつゝ高天原迄とんで、天照大神の御前に落ちたり。大神拾ひて見玉へば鮮血羽を彩れり、よく〳〵見玉へば、これ疑も無くかの若日子に賜ひつる羽々矢也。大神、「これはたして若日子が中國の暴ぶる神を射しなるか、はたや、彼が不忠の爲によつて射られし矢か、もし左あらば、疾く飛び反つて若日子が胸をつんざけ。」と仰せ玉ひつゝ、其矢をとつて投げかへし玉へば、矢は再び虚空に響いて下界にとび、彼の若日子が胸に發止と立つ、げにや神譴あやまたず、自ら射し矢に射られて、若日子は忽ち命絶えぬ。

若日子の妻下照姫は夫の横死を見て驚き嘆く事云ふばかりなし。身も消えよと泣き哀しむ聲、風のまに〳〵飜つて天上に聞ゆ。若日子の父、天津國主命これをきゝて心を傷め、窃かに天降つて喪屋を作り、河雁、白鷺、翠鳥などの鳥共夫々の役をつとめつゝ、八日八夜の間、音樂を奏して若日子の魂をよびかへさんとせしが、つひにまた返る事なかりき。

度々の御使、皆成功せず、大神の御苦心も甲斐なくなりぬ。されど御決心は、つゆ動く可くもあらず、最後の大會議はこゝに開かれ、更に大規模の征討軍を遣はしたまはんとす、途遠くして任重し、誰かよく此功をなす者ぞ。

思兼命、また思ひはかりて、天安河の河上なる天石窟にいませる伊都之尾羽張神か、然からずば、其子武雷神やよからんと奏し、且つ、天尾羽張神は天安河の水を逆に塞き上げて途をふせぎゐれば他神にては行く事を得じ、天迦久神ぞ此御使には當る可きと申す。大神乃ち天迦久神をして、命を尾羽張

神に傳へしめしに、尾羽張神、自らは辭して、わが子武雷の神をすゝめ申す。尾羽張神は、かの伊弉那岐神が迦具土神を斬り玉ひし時、十拳の御劍の閃々の光より生れいで玉へる神也、其子武雷神の剛勇無雙また知る可きなり。

此剛勇無雙の武雷神を大將軍とし、飛行自在の天鳥船命を副將としたる天軍は、出雲國伊那佐の小濱に天降りつ、萬里の天風に征衣の袖を吹かせ、怒濤湧き返る海原の上に陣し、まづ大神の命を傳ふ可く大國主命と會見せんとす。忽然として天の一角より降りし威風堂々たる天軍の、いかに出雲朝の上下を震駭せしめけるぞ。

大國主命やがて出で來ませり。武雷神、劍を引拔き浪の上に立て、其鋒先に胡坐しておごそかに大國主神に問ふ。

「われら、天照大神、高皇産靈神の詔によつて來りぬ。汝が領せる此葦原中國はわが御子の治めし玉ふべき國なりと詔ひぬ。汝が心いかに、奉るべきか否や。」

大國主命、「詔かしこまりぬ。されど、今は何事もわが子八重言代主命に讓りたればかれすべて御答へ申す可し。今、三崎の岬に漁りにいで行きたれば皈るまで待ちたまはる可けん。」と申す。

武雷神、乃ち鳥船命を遣はして急ぎ召しよせしめ玉ふ。事代主神は温和なる神にてましまし。旨を承るや、父神大國主神に向ひて、「大詔いとも畏し、此國は天神の詔のまに〳〵奉る可き也。」と申し、今乘り來し船を踏み傾けつつ、天逆手といふ呪してはた〳〵と御手打ちたまへば、船は忽ち青柴垣となりて命を隱しぬ。命隱れてまた遂に此世にいで玉はず。

武雷神、更に大國主神に向ひて問ふ。「なほこの外に物いふ可き子やある。」

「まだ建御名方といふあり、こを除きてはなし、願くば一度かれに天神の詔を傳へ玉へ。」

大國主命のかく答へ奉る言葉半ばに、その建御名方神現はれ、千引石を輕輕と手末に振上げつゝ、「誰ぞ、わが國に來て忍び〳〵にかく物言ふ、此國いかでおめ〳〵と奪はれんや、わが國をとらんとならば、いでわれと力くらべせよ。」爛々として血走りたる眼の眦を裂いて、腕とりしばつて怒號しける。此神剛健にして慓悍也、名分わきまへざるにあらず、あかも一片敵愾の念、また俄かに屈服するに忍びざるものある也。

こゝに二神の力較べははじまりぬ。建御名方、先づ武雷の腕をとりひしがんとせしに、その腕忽ち氷の柱となる。驚きて握りかへんとすれば、あな、明煌々たる劍の刃となりぬ。建御名方益々打驚きて手を退く。次に武雷、建御名方の手をとりて、若葦などを握るが如く搤みひしきて投げ放つ。建御名方つひに及ぶ可きにあらずと、怖れおの〻きて逃げいだしぬ。

武雷、のがさし、何處迄もと、大手擴げてまつしぐらに追蒐けゆく。野越え、山越え、逃ぐる神、追ふ神、おらび叫んで走る狀、黑旋風の舞ふが如く雷霆の鳴りはためく如く、とゞろ〳〵と踏み鳴らす足音に、天柱碎け地維裂けんばかり也。

かくて、信濃國の諏訪湖のほとりに到りし頃、建御名方力つきたり。遂に武雷の足下にひれふして降伏す。「かしこし、あなかしこし、願はくば命ばかりは助け玉へ、今はわが父大國主命の命にも違はじ、わが兄八重事代主神の言にも違はじ、この葦原中國は、大神の詔のまに〳〵その御子に奉らん。」と降伏す。

武雷神、出雲に歸りて大國主神に向ひ、「今は汝が子ども、事代主も建御名方も悉く服從しぬ。皆、天神の御子に此國を奉る可しと申す也。汝が心いかにぞ。」と重ねて決答を促がせしに、大國主命、「兒等がこゝろ已に然らんには、われまた何事をか申さん。」と潔く命を奉じ、且つ多藝志の小濱に饗宴をはり

て天神が遠征の勞を慰めき。其とき、此の國を平定せし時杖つかせ玉ひし廣矛を二神に授けて、「われこの矛をもて治功を奏せり、天神の御子此矛を用ひて國を治め玉はゞ、必らず亦平安にましますべし。」とて、これを武雷神に授け玉ひぬ。

大國主命、已にかゝりければ、其他の國々端々の神、みな先を爭うて天軍に降伏し、葦原中國は時の間に治まりぬ。唯かの、紺青の夜の空に見え隱れ常ならぬ星の神香々男のみあたがはざりしが、夫も遂に降服しぬ。

度々の御使、今やうゝに平定の功を奏して、天軍高天原もゆるぐばかりの捷鬨あげてかへり上る。

一三、大義名分

大國主命は、かく國讓りし玉ひし後、杵築の宮に在しき。今の杵築大社は即ちこの神をまつる。

或は八千矛の神となり、或は葦原醜男となりてやうゝに大國主となり玉ひし幾十年の經營苦心を、一朝にして拋つて、あげて悉く天孫に附す。此大國主命の光風霽月の如き心胸は、實に大義名分のよつて別るゝ所あるを示せる也。初め天つ神、伊奘那岐伊奘那美の二神に此漂へる國を修り固め成せと詔し玉ひしより、やゝわが大八洲の國は實に二神剏めて開き、二神はじめて君を立て、二神はじめて民を生ぜしめ玉ひし也。されば其御子位に在まして、その君は萬世の統を傳へ、民は無窮にその君を奉戴すべき也。されば、天照大神がその御子、天忍穗耳命をして、この中國の大君となさしめ玉はんとするは、亦まさに然る可き理なりと云はざる可からず。

大國主命は、素盞嗚尊の御子にして、天照大神の正統にあらず、且つや高天原に生れ玉ひしにもあらず、されば、これまことの君統にあらざる也。大

國主命の出雲に於けるは宇志波部流也。治すにあらず。宇志波久は領するといふ程の意味、あろすの統治の意なるとは、名分素より異なれる也。

かゝりければ、建御名方神こそ、さからひ拒みけれ、大國主命も事代主命も、あへて爭ひ玉はず、中國の授受は、大概平和の間になされける也。

かくて出雲朝は遂に一段落を告げぬ。

顧れば、素盞嗚尊、八岐大蛇、櫛名田姫、水臣津野神、大國主命、八上姫、因幡の兎、須勢理媛、少名彦神、事代主命、建御名方神、灰色の雲と濃藍の海とに圍まれたる古出雲の地よ、神祕深き傳說と詩趣豐かなる口碑と、げにわが日本歷史の搖藍の地にてありし哉。

一四、天孫降臨

武雷命、かへり上りて、葦原中國の全く平定したる旨を奏上す。大神乃ち御子天忍穗耳命に、「疾く天降り、行きて治めよ。」と仰せ玉ふ。

忍穗耳命畏みて用意し玉ひける間に、天邇岐志國邇岐志天津日高彦火瓊々杵命生れましぬ。忍穗耳命、此御子を代へて降さんと白し玉ふ。これ、高皇皇靈命の御女栲幡千々姫のおん腹也。大神ゆるし玉ひつ。乃ち御孫彦火瓊々岐命に詔して、

「豐葦原の千五百秋の瑞穗國は、わが子孫永く王たる可きの地なり。汝就いて治む可し、寶祚の隆なる事、天壤と共にきはみ無けん。」

と仰せ玉ひ、八咫鏡、天叢雲劍、八尺勾曲玉を執らして、永く皇統の御しるしとせよとて授け玉ふ。殊に御鏡を執り玉ひて、此鏡を見る事、猶われを見るが如くし、殿を同じうして齋きまつれとのたまふ。一度下し給はゞ再び上りきまさん事いと難かる可し。愛孫の命の萬里の遠征を見送り玉ふ大神の御情、かなしくもまた貴とかりけるや。かくて、天兒屋命、天太玉命、天鈿

女命、石凝姥命、主祖命を各部長として附きしたがはしむ。これ五伴長なり。天兒屋命、天太王命は中臣、齋部の祖神なり。又天忍日命、天津久米命、武官として靫を負ひ、劍を佩き、弓矢を持して御前に立ちて、仕うまつる。これ大伴久米等の祖神なり。

かくて、今や降臨ましまさんとする時、先驅の神はしり皈りて、「天の八衢にあやしき者ありて途を塞げり、身の丈七尋ばかり、鼻の長さ七咫、口よりも尻よりも光を放ちて、其光上は高天原を照らし、下は葦原中國を照らせり。」と申す。諸の神達、出でゝ見玉ふに、皆其狀の怪異なるに驚ろきて、誰ありて立ち向はんと云ふ者なし。こゝに天照大神高皇產靈神、天鈿女神に詔し玉ふ。「汝は手弱女なれども心强く猛し、往いて問へ、此わが子の降りまさん道を塞ぐはいづれの神ぞと。」

鈿女かしこまり、天の八衢に往きて彼の神に立向ひて詰れば、彼神、「われは國神猿田彦神也。天神の御子降りますと聞き、御先導申さんとてこそ此處には待てり。」と申す。

鈿女、此旨を復命す。大神打ちよろこび玉ひて、猿田彦神に命じて先驅せしめ玉ふ。

天孫瓊々杵尊、こゝに天磐座を離れ、八重の雲路を押しわけて肅々と天降り玉ふ。八千矛の影、朝の日、夕の日を受けて雲の間にきらゝめき、曲玉の音、天つ風に搖らゝめいて、琅々と鳴り響く。如何に莊嚴なるおんよそほひなりけん。

かくて猿田彦神の導き奉るまに〳〵、山を越え海を渡り、遂に日向なる高千穗の二上峯に著き玉ふ。其時一天俄かにかき曇り、暗澹として晝夜を分たず又物色を辨ぜず、猿田彦神さへ方向を失ひて、行く可き方を知らず、衆神たゞまどひわび玉ふ。瓊々杵尊もいと訝しと思ひ煩ひ居玉ひしに、土人大鉗

小鉗といふ二人出で來て奏しけるが、「こはあやしき神の爲業なる可し。天孫御手づから稻千穗を拔き玉ひ、籾として四方に投げ散らし玉はゞ、直に分明にならん。」といふ。尊乃ちいふが如くし玉へば、天色見る〳〵晴れ渡りて日光たちどころに鮮麗也。

今の高千穗峯は即ち此山なり。打見渡せば、東の方、大洋の波浪頌樂を奏でゝひるがへり、西の方、連巒群峯、臣從するが如く打ちひれふす。げに天そゝる高千穗の雲間よりぞ、この日の本の光輝はほがら〳〵とさし染めける。

猿田彦とは如何なる神なりしか、これ伊勢國神也。草のかき葉も打靡く大神の御稜威とは申せ、此頃畿內東海の邊には、なほ割據の土賊共多かりければ、夫等の者共若し天孫の降臨を拒ぎ奉るやうの事ありては畏多くも口惜しき事也と思ひければ、夙に名分を辨へ玉へる此神は、先づ筑紫の方に導き奉るに如かじと思ひめぐらして、數多の國神共のある中より、ひとり率先して天の八衢迄上り行きけるなる可し。大國主命以外の國神にて、まづ天孫に仕へまつりしは此神也。此神や實に忠良の第一神なりけり。かくて高千穗の嚮導終りし後、猿田彦神は其本國なる伊勢に皈らんとす。瓊々杵尊天鈿女命に詔してそを送りつかはし玉ふ。猿田彦、伊勢に皈るや部下を集めて長く天孫に仕へ奉る可き由を諭す。天威此時既に東海に及べる也。鈿女も此時より伊勢に止まり、其跡を繼ぎて猿女君と云ひ、子孫長く朝廷に仕へ奉る。

一五、木華開耶姫

高千穗峯の麓を稍去りて海邊に向へる所に、笠狹の岬と云ふ所あり、蟹烟蜑雨、磯吹く風も岸打つ波もいと淋しき浦曲なりしが、瓊々杵尊巡回して此地に來ますや、「これよき地也。朝の日の直射す國、夕の日の直照す國ぞ。」と仰せて、命じて宮居をつくらせ玉ひぬ。これ、笠狹宮なり。

尊一日、輕裝して三四人の從者をしたがへ、海邊を逍遙し玉ひしに、機織る音、いづくよりか風のまに〳〵聞ゆ。尊何となく懷かしと思し玉ひ、尋ね行きて見玉ふに、波打際に八尋殿を建てたるあり。窓の下に忍びよりてそと覗き玉ふに、世に麗はしき少女の機を織れるなりけり。尊進みよりて問はせ玉ふ。

「誰が女ぞ、名は何と申すや。」

少女、半ば驚き半ば嬌羞ひつゝ、

「大山祇の女、木華開耶姫と申し侍る。」

尊重ねて問はせ玉ふ。「同胞ありや。」

「石長姫と申す姉一人侍る。」と姫は答ふ。其言葉、その振舞、いとしとやかに床しく見えければ、尊御心動き玉ひて、「汝わが許に來ずや」と詔ふ。開耶姫の花の頰は見る〳〵濃き紅に輝けり。伏目して微かに答へまゐらするやう、「願はくは、父に謀り玉はれ、妾亦相語らひ御答へ申さん。」と申す。尊げにもと頷き玉ひ、其由大山祇命に仰せ下し玉へば、命大によろこび、木華開耶姫に其姉岩長姫を添へ、種々の貢物持たせて、尊の御許に送り奉る。

尊、開耶姫を得て、喜び玉ふ事言はん方なかりけるが、姉の姫は其貌いと醜くて開耶姫には比ぶ可くもあらず、乃ち姉の姫を歸させ玉ひける。父の命岩長姫の還されたるを見て、「われ、二人の女を奉れるは故こそあれ、石長姫を遣はしては、天神の御子の御命、雨降り風吹けども常へなる事石の如く、常磐に堅磐に動きまさずましませ、木華開耶姫を遣はしては、木花の榮ゆるが如く榮えませとの意にてありしを、今や姉を返して妹をのみ留め玉ふ、御子の御壽、唯木花の如く脆うこそおはしまさめ。」と打嘲てども甲斐なかりけり。

程經て、開耶姫妊身玉ひぬ。尊いかにおぼし玉ひけん、そは必らずわが子

ならじ、國神の子ならんと詔ふ。開耶姫、餘り思ひの外なる仰せに、口惜しさ悲しさ腸を斷つばかり也。血涙を揮つて申す、いかなれば左はつれなき御疑ひを懸け玉ふぞや、正しく君が御子なること、いで必らず證し立て申す可しとて、戸無き八尋殿を作り、自ら其中に入り玉ひ、土を以て四方を塗り塞がせ誓ひてのたまはく、わが子は天神の御子なり、火もいかで燒くを得んや若し天神の御胤ならずば直ちに燒け死になんと。内より火をかけて產み玉ふげにや正しく天神の御子、燃えさかる炎の中より產聲高く、二柱の御子誕生あらせらる。第一を火須勢理命、第二を火遠理命また彦火々出見命と申す。身を殺して其貞淑を證し玉はんとせし開耶姫の決心、何ぞ夫れ壯烈なるや。はた烈火の中より生れたまひし御子、何ぞそれ靈異なるや。

かくて尊西偏におはし玉へりしかども、御稜威到らぬ隈もあらず、惡神を攘ひ殘賊を擊つて、略平定の功を擧げ玉ひしが、かの大山祇の言葉空しからず天神亦無窮の壽おはす事あらずして、遂に可愛の御陵に葬し奉る。

されど、萬世一系の皇統こゝにはじまり、金甌無缺のわが大日本帝國の根柢こゝに成る。尊き哉、またかしこき哉。

一六、海の幸・山の幸

二柱の御子、火須勢理命、火遠理命、遊獵を好み玉ひて、或は山に或は海にいでまさぬ日もなし。火須勢理命は海の幸あり、魚を漁るに巧に、火遠理命は山の幸あり、鳥獸を獵るに妙を得玉ひしが、ある時相謀りて幸と幸とを易へ交ひつ、兄の命は弓矢を持ちて山に入り、弟の命は釣鈎を持ちて海にいで玉ひぬ。さて獵り玉へども、幸は人にありて器にあらず、火須勢理命の射る矢に中る一匹の兎も無く、火遠理命の鈎に懸ゝる一尾の赤魚だに無し。火須勢理命、荆蕀の中に奔り疲れていと不興氣にかへり玉へば、火遠理命、潮た

れ衣肌を寒み、打ち悄れてぞ歸りける。

兄命、乃ち、山幸も己が幸々、海幸も己が幸々、今は元の如くせんとて、弓矢を還して鈎を求め玉ひぬ。弟命はたと當惑したり、鈎は魚に奪り去られける也。「ゆるし玉へ、代の鈎を參らせん。」とて、新しき鈎を造りてまゐらせしが、一徹の兄命、もとの鈎ならではとて許し玉はず。此度は佩き玉ひつる劍を碎き五百本の鈎を作りて奉りしが、なほ許し玉はず。此度はまた、千本の鈎を作りて奉りけれども、兄命、斷じて許し玉はず。いかにしても元の鈎を還せ、その魚よりとりかへして來よ。」と責めはたる事急也。

弟命、いかにせんと思ひ惑ひて、一人海のほとりを彷徨ひ玉ふ。夕暮の風冷たく沖より暮れ初むる紺青の海を吹いて、仄かなる波頭に舞へる千鳥の聲悲しげに聞ゆ、あはれ、いかにして鈎を尋ぬ可きぞ。

折柄白銀の髯打靡けつゝ、杖に縋りて辿り來る翁ありき。鹽槌之神也。翁、

命の樣を見て、「あはれ天神の御子、いかにして泣き玉へる。」と問ふ。命、其理由を告げて、「いかにせん。」と打泣く。

翁、ゐばらく頭傾けてありしが、「御心傷め玉ふ勿れ、われ君の爲に計り申す可し。」とて目無籠といふを作り、これに命を入れて海の中に送りぬ。目無籠は、海藻の叢を縫ひ、珊瑚の林をぬけ、魚族の群を搔き分けつゝ、八重の潮路を搖られ〳〵て、千尋八千尋の底深く沈み行く程に、美しき砂濱の路一筋遠く續けり。其彼方に莊麗なる宮殿ありて層り合へる棟々の甍まばゆく輝けるが見ゆ。命、目無籠を捨てゝ辿り行けば、門あり、門の側に井あり、井をおほひて大なる桂の樹繁れり。やがて門開きて人の出で來る氣配す。命慌て玉ひ、其の桂樹に攀ぢ上り、綠葉の中に身を潛めて窃に覗ひ居しに、侍女と覺しき美しき少女、手に玲瓏たる玉の碗を持ち井の水を汲まんとす。然るに命の影水に映りゐたれば、少女打驚きて梢を見上ぐ。命今は隱るゝ術もな

く、「その水われに飲ませよ。」と仰せ玉ふ。少女、乃ち碗を捧ぐ。命頸飾の曲玉を一個はづして口に含み、水を飲む樣しつゝ碗の中に吐き入れて返し玉ふ。少女碗の中に美しき玉あるを見て、とらんとせしが接きて離れず、不思議の事よと思ひつゝ、そのまゝ新しき水を汲み入れて門内に走り入りぬ。

此處は海の神、豐玉彦命の城にして、彼の少女は海神の娘豐玉姫の侍女なり。姫の前にその碗を捧げかく〳〵と申す。姫もいと不思議に思ひていで見しに、實に桂の葉隱れに氣高くうるはしき神ぞおはせる。

姫、胸躍らしつゝ、此趣を父命に告げしかば、豐玉彦命出で見て、「あなかしこ、此神は天津日高の御子空津日高にこそましませ。」とて、歡び迎へて懇にもてなしつゝ、さて、いかにして來ませると問ふ。命乃ち鈎を失ひし事の始終をくはしく語り玉ひぬ。海神、「いと易き事也、尋ね求めてまゐらす可し。」とて、命を傳へて海中の魚族共を悉く召しよす。鮫、鱶、鮪、比目魚、鯖、鰺、鱸等、皆鰭振りはへてわれ先にと伺候す。海神自ら夫等の魚族共に就きて審ぶれ共、火遠理命の鈎をとれりといふもの無し。然るに此日赤魚のみひとり參らざりき。何故の不參ぞと尋ぬれば、先頃より口の病に惱めりと云ふ也。乃ち彼の赤魚を召しよせて審べしに、果して其鈎を得たり。

火遠理命よろこび玉ひ、疾く歸らんと思し玉ひしが、海神止めて歸し奉らず、遂にその女豐玉姫をみあはせ奉りぬ。

かくて、夢の中にまた夢を見る心地して、火遠理命は三年程此處にあり經玉ひしが、故郷を思ふ心堪へがたくなりぬ。ある夜、ひとり窃に嘆きたまふこと連りなり、豐玉姫、此狀を見て、何故ぞと訝かりつゝ父神に此由を告げ玉へば、豐玉彦命、命の御心を察し奉り、一尋鰐をして上國に命を送り還し奉らんとす。「天神のこゝに來ませし事、いつの世にか忘れん、君もまた忘れ玉はざれ。」とて、具に惜別の情を盡し、且つ、「この二つは潮滿珠、潮干珠

と申し、また無き寶也。潮干珠を出す時は、いかなる洪水も忽ち涸れ、潮滿珠を出す時は、四邊立所に水と化らん。これを以て彼のまつろはぬ者共を打懲し玉ひ、上國の主と仰がれ玉へ。」とて二箇の玉を授く。

波の音寒く胸に沁みる夕也。火遠理命は一尋鰐に乘りて三年住み慣れし海底の都を去り玉はんとす。逢ふは別るゝの始めと云ひけむ、さりや餘り果敢無き緣の、今はなか〳〵に恨めしくて、波の穗の、ほのかに去り行く御船を見送りつゝ、姫は砂に轉びて胸も裂けよと泣き玉ふ也。

かくて、火遠理命は、再び笠沙の宮にかへり玉ひ、兄の命に彼の鈎を返上したまひしが、一度破れし兄弟のお仲らひ、また睦しからず。兄命は屢々暴戾の擧に出でゝ弟命を苦しめ玉ひ、遂には兵を率ゐて襲ひ寄せ玉ふ。火遠理命、かの海神が授けし潮滿珠を出し玉へば、海潮遽かに漲りて兄命見る〳〵溺れ玉ふ。兄命大に驚きうろたへて、「われを助けよ。」と叫ぶ。命、潮干珠を出して海潮を干し去りぬ。兄命又猛り立ちて、「われは兄也、何ぞ弟に從はんや。」と再び反抗の氣勢を動かし玉ひければ、命さらばとて、再び潮滿珠を出し玉ふに、海潮滔々として漲り起り、兄命山に逃ぐれば山を涵し、更に樹によぢ玉へば樹を浸さんとす。兄命今は遂に勢窮り玉ひ、「われ過てり、今より後長く汝に從ひ、狗人として仕ふ可し。」とて屈服す。これ薩摩隼人の祖先にておはしませり。

後、ちばらくありて彼の海神の女豐玉姫命、海底より上り來て、「妾已に身籠り侍れりしが、今御子産るゝ時となりぬ。天神の御子、海原に産み奉る可からず、よりて參り上れり。」と申す。命、海岸に産屋を建て、鵜の羽を葺草とし玉ふに、未だ葺き合へぬ間に御腹堪え難くなりつゝ急ぎ入りて産み玉はんとす。其時姫、「凡そ子を産む時は皆本國の形に化りて産むもの也、ゆめ、内を覗き玉ふ勿れ。」と云ふ。何故に見るなとは云へる、半ばの怪訝と半

ばの好奇とに驅られ、窃に産屋の戸をさしのぞき玉ひし命は激しき驚愕に胸を擊たれて、呀やとばかり飛び退りぬ。何事ぞ、そこには美しき豐玉姫の姿にはあらで、八尋餘の巨なる龍わだかまりて悶き惱める也。

豐玉姫命は、淺ましき姿を見られける耻づかしさに、御子産み終るや、直ちに父の國海原の底深く去り玉ひぬ。其御子の御名は、産殿の未だ葺き合へぬ間に生れしを以て、彦波瀲武鵜葺草葺不合尊と申す。

さて、豐玉姫は御心強くも故郷へ還り玉へど、綣繾の情遺る方も無く、且つや、殘し置き玉へる御子の上をも案じ煩ひ玉ひて、其妹玉依姫命と申すを、御子を養ひ奉らん爲に送り遣はし玉ふ。其時火遠理命に一首のおん歌をよせさせ玉ふ。

赤玉は緒さへ光れど白たまの、君がよそひし、たふとくありけり。

白玉の麗はしきに、夫の君を擬へて、此三十一文字に限りなきの眷戀の情を寄せ玉へるを見よ、火遠理の命を哀れ深くおぼしつゝ、

おきつ嶋鴨着く島にわがいねし、いもは忘れじ、世のことゝに。

と、返し給ひぬ。ありし世の夢の懷かしくもまた戀ひしき哉。千五重の波の彼方此方にわづかに通ひし此二首の歌のおん情よ。

火遠理命崩れ玉ひて、鵜葺草葺不合命、おん跡つがせ玉ふ。此葺不合命に四人の御子おはす。五瀨命、稲氷命、御毛沼命、若御毛沼命と申す。末の御子ぞ後の神武天皇、大和の國に都を遷して天神授國の本意を遂げ玉ひしおん神なる。

一七、神話と歴史——わが建國の理想と精神

謂ふ所の神代は以上に終れり。前にも云へるが如く、太古の歴史は神話の連續也。以上說き來れる神代の歴史に於て、余は日本の神話の顯著なるもの

の、殆んどすべてを盡せるを思ふ。これ等多くの神話の中には、天の岩戸の如き、素盞嗚尊の大蛇退治の如き、因幡の兎の如き、海の幸、山の幸の如き、已にお伽噺化せられて人口に膾炙せられつゝあるもの、將た少なからず。

回想す、吾人年少の頃。正月と共に最も大なる樂しき期待を以て迎へし年中行事の一は實に村の鎭守祭なりき。かの森蔭に立てる大幟のひらめきと、打ちはやす笛太鼓の音とに胸おどらせつゝ、いそ〳〵と其のどよめき合へる群集の中に身を投じたる時、忽ち吾人の眼と心とを奪ふものは、眩き錦繡の袂を飜しつゝ奇異なる面貌の人々が演ずる假床の上の物眞似劇にして、父兄は吾人の熱心なる問に答へて曰く、彼は天照大神也、彼は素盞嗚命也、彼は彦火々出見命にして、彼は火須勢命也と。げに蛇殺し、海の幸、山の幸の物眞似劇のいかに興味深き印象を吾人少年の頭腦に印象したりし乎。

又、彼のお伽噺を耽讀しては、桃太郎と共に花咲爺と共に、因幡の兎を知り、大國主命を知り、はた天照大神と天鈿女命とを知れりき。源義經、加藤清正を思ふまへに、吾人は先づ彼の不可思議なる神話の中の英雄を思ふ事によりて多大の興味を感じたりしを忘るゝ能はず。なじみ深き神話の人々よ。

神話は歴史の冠冕也。源泉也。歴史を遡れば必らず其處に神話を得べし。新しき土に新しく開けたる國ならば知らず、建國の日を遼に幾千載の昔に有せるの國は、必らず其稽ふを得可き歴史以前に此夢の如き幾多の神話を有せざるべからず。支那において然り、希臘に於てしかり、羅馬に於てしかり、實に其神話に富めるは、歴史の長きを證するもの也。故に曰く、神話は歴史の源泉なると共に、また歴史の冠冕也。

歴史家の説によれば、上古に於ける亞細亞人種の遷徙には、二つの大潮流ありき。一流は中央亞細亞より東西へ横流し、葱嶺天山を回りて滿洲の野にそゞけるものにして、一流は印度より海路をとり、彼の南陸の參差たる岬角

をめぐり、星布せる群島をたどりて安南呂宋より日本韓地まで侵入せる民族なり。而して、わが國家を創建せるものは其後者にして、かの范々たる天空のあなたより天降りませりといふが如き、水や空、空や水なる大洋の彼方より、輕舟に乘じて漂ひきたれるを云へる也といふ。あるひは然らん。いづれにせよ、剛健にして侵略的なるわが國民が、天風と海濤とによつて錬成せられし海洋的民族なりし事。あらゆる點よりの例證によつて爭ふ可からず。而してこれ等の民族が上古に於て活動せし舞臺の、大八洲はさらなり、海外に亘りてすこぶる廣かりし事も亦爭ふべからず。たとへば、瓊々杵尊が三柱の御子にその統治を命じたまひし高天原とはいづこなりけん、夜食國とはいづこなりけん、滄海の國とはいづこなりけん、恐らく皆、海外の國々なりし也。彼の素盞嗚命が朝鮮經營につとめ玉ひし事は、歴然として明かなる事實にして、命これより南はわが領土ぞと宣らせ玉ひ、御劍を以て半島の基部を割斷し玉へば、その痕、今に流れて鴨綠の大江となれりてふ傳説さへあり。所謂目無籠にのりて、火遠理命が行き玉ひしといふ彼の海の都も、また支那朝鮮の一部なりしなる可し。輕舟を以て家となせし海濤民族が、その侵略的精神のむかふがまに〳〵、縱横自在に東半球上に雄飛したりけんさま、これ等の神話の隨るところに暗示せられあるにあらずや。

されど、これ等の事實を一々科學的に系統的に考究せんとするは、至難にしてはたおろかなるわざ也。神話はあくまでも神話として存在せしめよ。神話は神話そのものとして、それが含める事實よりも、むしろ、夫が示せる精神と理想とに、最も多くの價値と、大なる權威とをもてるなり。

げに、わが建國の精神と理想とを遺憾なく吾人にかたるものは、これらの神話にはあらざる乎。

わが古傳説は、先づ天地初めて發くるの時より説き起し、わが國家及び國

民を天地創造の神々より系統を引ける所の、國家及び國民也となせり。高皇産靈神と云ひ神皇産靈神といふ。皇産靈は生産と云ふ意にして、これ生々原理の神也。更に大日靈貴神に至つては、實に久方の天つ日かげによつて象徴せらるゝの神にてましまし、その德光の世界萬國の上に及ぼしたまへるを見る。かの天照大神に白す祝詞に曰く、「ことわきて、伊勢にます天照大神の御前に申さく、皇大神の見はるかします四方の國は、天の壁立ちきはみ、國の退き立つ限り、青雲のたなびくきはみ、白雲のおりゐ向か伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の舳の至りとゞまる極み、大海に舟みちつゞけて——。」以てわが建國の理想と精神とのいかに遠大にして雄偉なりしかを知るべきなり。われ等が祖先は、此大東の一海島を根據として、こゝに一大帝國を建設し、その德光を以て坤輿球上のあらゆる國々島々を統一せんとする理想と精神とを以て此國を開けりしなり。御勅語に、「わが皇祖皇宗、國をはじむる事宏遠に、德を樹つる事深厚に。」とのたまはせ玉ひしも、畏みておもんみるにまことに此謂にてある也。

わが建國の精神や、實に斯くの如く遠大にして、わが建國の理想や、實に斯くの如く雄偉なりき。而して又、わが國家成立の特色とすべきは、その一家族より發達せし情誼的國家たりしといふ事也。

皇統は國民の本づくところにして、國民は皆皇家の末流、其上和下睦は理によつて得たるにあらずして、あくまでも情の自然に出でたる也。わが國家は、天の瓊矛の滴りの凝つて自凝の島をなせる如く此自然の情自ら凝つてなせる國家なり。これ、世界國多しと雖も、また他に比を見ざるところにしてわが國民の最も誇稱する皇統連綿として萬世一系、天壤と共に無窮に在す所以は實にこゝにある也。

斯く一家族より發達せし國家なれば、則ち其祖先を共通にし、其共通の祖先

を懷ふ事によりて團結は益々固くせられき。又、反對に、團結の益々固くせらるゝと共に祖先を懷ふの情更に厚きを加ふ。かくて、一朝事あるや、皆相集ひて祖先をまつり、其方針をはかりあへりき。八百萬の神達が、天の安河原に神集ひまして合議せること、彼の天照大神の岩天戸に隱れ玉ひし時の如く、此風は即ち彼の祭政の一致をなせり。わが國の祭政一致は、實に團結强き一大家族的國家がひとり得しところの特色なりし也。

一八、上代の風俗

なほ、上來とき來りし幾多の神話の註釋たる可き範圍において、太古の風俗の一斑をかたるべし、

その頃法律の特に定められたるものは勿論無かりき。されど贖罪といふ事あり、その所持せる財産を捧げて、罪を贖ふの習なりき。素盞嗚尊が天高原を追はれたまふや、其罪、物を以て贖うて、尚贖ひ足らざりければ、更に手足の爪を拔かしめられ玉ふ。これ身を以て贖罪せし也。

衣服は、上なるを衣、下なるを袴、左衽にして窄袖なるを常としき。髮は、男子は中央より二分して鬢にまとひ、女子は一本に結び束ねて後に垂らす。櫛は男も女も共に之を用ひき。又、玉を着けて裝飾となし、頭につくるを玉髮と云ひ、頸なるを頸玉と云ひ、手なるを手玉と云き。

家屋は木造にて、彼の「高天原に千木高知り、底つ岩根に宮柱太しきたて」といへるを見て、ほゞ其制を知る可し。吉凶ある毎にこれを作る。新婚の時、産の時、喪の時。而して喪の禮など、頗る厚く、八日八夜音樂を奏でゝ死者の靈を祭ることなどありき。されど死の穢をにくむ事亦はなはだしかりしは、伊邪那岐神が黄泉國より逃げかへりたまひし時、日向の橘の小門にて身の禊をなし玉ひしといふにても知らる可く、また天の若日子の死するや、高天原よ

り其舊友阿藕斯機高日子根神の喪に來しを、若日子の父、妻等、その神の貌の酷似せしを見て若日子やよみがへれると打喜びて袖にまつはりしかば、高日子根の神奮然として、いかなればわれを穢き死人には比べつるぞと、劍を拔いて喪屋をきり伏せつゝ、袖を拂つて天上にはせ歸りぬといふ一話についても知らる可し。其時、高日子根神の同母妹高比賣、人々の誤認をとくとてよめるうた。「天なるや、おとたなばたのうながせる、珠のみすまる、みすまるに、あな珠はや、三谷ふたわたらす、あぢしきたかひこねの神ぞや。」

言たまのさきはふ國とうたはれけむ、これら古き歌、または彼の祝辭なども見ても、いかに言語の優美にして豐富なりしかを知る可く、更に文あるものは武あり、細矛千足國といふ稱さへありて兵器などもよくとゝのへりき。弓、矛、太刀、やなぐひ、箙、靫、鞆など皆精鋭なるものありし也。目無籠、一尋鰐、これらは剛健なる海濤民族が、乘じて以て雄飛せし一葉舟の稱呼なりしなる可し。

婚姻は、現代謂ふ所の自由戀愛なりしなるべく、其一夫多妻を異とせざりしは、無限の活力を有せる原始の國民が、其種族の膨脹强大をいたす可く、亦必要の一方法なりしと云ふを得可き乎。をかも婦道の嚴正なりしは上古また今とことなるなかりしこと、須勢理姫が大國主命によせ玉ひし左の御歌によりてもうかゞふを得可し。

「八千矛の神のみことや、わが大國主こそは、男にいませば、うち見る島のさまぐ、かき見る磯のさきおちず、若草の妻もたせらめ、わはもよ、女にしあれば、汝おきて、男はなし、汝おきて夫はなし。」

櫻咲くわが日の本のあさぼらけ、千早ふる神代の事はたゞ遼邈として夢の如き哉。あゝわれ等が祖先よ、瞑目して思へば薄明の光の彼方に、ほのかに曲玉の音響き、白衣の袖の飜へるを見る。あはれ、かの神話の人々、われ等

が祖先の神々よ。

さらば！　余はかの靈異なる神々に別をつげて、この神代記の筆ををさめ、更に人皇第一代より說きおこさんとす。曙光は今すでに高千穗の一角よりさしそめつる也。

一九、大業恢弘

瓊々杵尊、火遠理命、而して彥波瀲武鵜葺草葺不合尊。

鵜葺草葺不合尊に至りて、高千穗峯の東岳のほとり、狹野といふ地に宮居をうつさせ玉ひしが、神武天皇こゝにて御降誕ましまし玉ふ。よりて御幼名を狹野尊と申し奉り、後神日本磐余彥火々出見尊と申させ玉ふ。天皇、叡武神聖にして大度あり、天晴大業を立て玉ふ可き御器量を具へたまひしかば、御年十五にして、五瀨命、稻氷命、御毛沼命の三人の兄命を超えて儲の君に立ち玉ひ、御年長じて、吾平津媛を納れて妃となし玉ふ。

天皇高千穗宮におはします事四十五年、西偏一帶の地は、悉く御威勢に靡きしたがへりと雖も、東方未だ擾亂止まず、土豪の專横なるもの常に干戈をこととして皇土を蹂躪し皇民を塗炭に苦しましむる事多し。天皇、慨然として平定の志をおこし玉ひ、諸皇兄諸皇子を召してのたまはく、「天祖の降臨ましませしや、實に中國平定の使命を以てなり、おかれども時に時鴻荒に屬し運草昧にあたる、あばらく此西邊に鎭して其機を待ち玉ひしなり。機は已に熟す、今やかくある可きにあらず。われきく、東方に美地あり青山四周せりと、以て大業を恢弘し天下に君臨するに足るべけん。宜しく就いて此地に都すべきなり。天下に王たるには禍亂をしづめざる可からず。四方に君臨するものは形勝の地に據らざるべからず。いつまで此西偏に跼蹐してあるべきならんや。乃ち師をおこして東方を經略せんとす。」

諸皇兄諸皇子、みな大御言を畏みて共に洪謨につかへんと申す。時に、海陸の精鋭陛下にみちて勢力の鬱然たるものあり。又鹽椎之翁といへる博識ありて、東國の事情もほゞあきらかなり、滿をひいてその刹那を失しつゝありしが如き概ある東征の皇軍、今や雲にそびゆる高千穂の、高根颪と共に、大八洲の草木を吹きなびけんとする也。

甲寅の歳十月五日、天皇自ら、皇兄五瀬命、稻氷命、三毛沼命、及び皇子手研耳命等を帥ゐ玉ひ、軍容堂々として高千穂峯より御進發あらせらる。

日向の國古市といふところに、ながらく御駐蹕あらせられ、こゝにて御舟をつくり兵杖をつくり、海に浮んで豐後の速吸水門を越え玉ふ。香高き瑞木の御舟、舳艫相ふくんで進ませ玉へば、平かに綠を敷ける内海の波、碎けては玲瓏の玉と躍り、沫いては燦爛の虹と輝く。天皇舷に立つて零烟渺々の彼方に浮べる國々の影を望みたまへる時、何者ぞや、ゆらゆる波に見えつ隱れつゝ御舟を慕ひてよりくる者あり、龜の甲に乘りて片手に釣竿を持てる異樣の神なりけり。

「汝は何物ぞ。」と天皇、問はせ玉ふ。

「國神宇都彦と申す者也。」とかれ答ふ。

「國神なりとや、さらば此あたりの海路を知れりやいかに。」

「掌にかけるが如く知れり。」と申す。

「さらば汝わが舟の嚮導者たらんや。」と天皇のたまはせ玉ひしに、彼、快然として、

「そのためにこそ斯くはまゐりつれ。」と云ふ。天皇乃ち、御舟より棹をさしいださしめて御舟の中に入れしめ、特に名をたまひて椎根津彦とよべり。

御舟進みて宇佐に着く、國神宇佐彦、宇佐津姫、「天神の御子來りましぬ。」とて喜び迎へたてまつり、一足騰宮と云ふを設けて、軍旅の御勞を慰籍し奉

りぬ。其他、近傍の國神、土豪等、皆御軍を迎へ、御稜威にひれ伏し、先を爭うて降りければ、軍氣ます〳〵振ひ立ちふるひ立つ。

筑前の岡田宮にとゞまり玉ふ事略一年、年の十二月、安藝の國に上陸したまふ。はじめて中國の土を踏み玉ひし也。此時一老翁ありて天皇をある小高き丘の上に誘ひまゐらせければ、天皇上りて四方を見玉ひしに、北は山、南は海、海門半ば開ける處、波は碧瑠璃を展べたるが如く、遠き島、近き島は、濃き淡き紫の陰影をうかべ、白鷗は白銀の翼をかざして長閑に飛び交へり、明媚なる此地の風光は豐かなる天皇の詩情を動かしぬ。「あはれ愛すべき地よ。」と仰せ玉ひ、こゝに宮居して、更に糧を貯へ兵を練り玉ふ。此宮を多祈理宮と稱し、また愛の宮とも稱す。天皇の愛したまひし地なれば也。愛の宮、また埃の宮につくる。こゝにゐます事七年。

更に、吉備の高島宮にとゞまり玉ふ事八年、また舟楫を作り、兵杖を鍛え、兵糧を貯へ玉ひぬ。悠々として急がず、あく迄も自重して容易く動かず、かくて徐ろに經略の準備をなし玉ひける也。大業は輕々の擧においてなる可からず、天皇の作戰計畫は實に周密を極め精到を極めたるものなりし也。かくて、前後ほとんど二十年を費したる後、いよ〳〵内海の波を蹴つて浪速に上陸したまひしは、戊午の年三月也。片山蔭の花のふゞきは、きらめく矛にも亂れたりけん、堂々として又堂々たる皇軍、今や蠻境深く長驅して、直に賊巣を殲滅せんとする也。

二〇、皇軍の轉戰

皇軍進みて浪速より河内に入り、行く〳〵小賊共を打ちたがへて青雲の白肩津に陣す。時に、鳥見山に據れる土賊の雄長隨彥と云へるあり、鷙悍にして强猛、多くの部下を從へて横行跋扈せり、前に瓊々杵尊の御子饒速日命

が天磐船に乘じて此地に來りしを迎へ、妹鳥屋姫を娶らしめて、可美眞手命を生ましめ、その父子を擁して中國に號令せんとせる也。たま〳〵皇軍の攻め寄するをきくや、地の利を知れる賊軍は、ひそかに一方の險を扼して、突如、皇軍の陣營をおそふ。皇軍、大にこれと孔舍衛坂に戰ふ。

虛空に鳴つてとび交ふ矢、血烟の中にきらめく刄、矢さけびの聲、鬨の聲、兩軍必死となつて激戰數刻をかさねけるが、皇軍遂に利あらず、一方の大將たる皇兄五瀨命、流矢に中つて深傷を負ひ玉ひぬ。

五瀨命、喘ぎ〳〵天皇に申すやうは、「われらはこれ日の神の子孫なる身也。あかるに今日に向つて戰ふ、されば日の神も怒り玉ふと見えしぞ。今日の戰に利あらぬは正しく此所以なりとおぼしきぞよ。如かず、一度軍をかへして南よりし、日を負うて戰はんには。」と、天皇實にもとうなづき玉ひ、帥をめぐらして、再ひ海路をとり、紀伊の方より攻め入り玉はんとす。

かくて、御舟、和泉國山城の水門をすぐる頃、五瀨命、おん傷の痛みに堪えさせ玉はず海水にうち浸して傷口を洗はせ玉ひしに、血海中に迸つて、唐紅に潮をくゞりぬ。かくて此海を血沼の海と命くるなりけり。御舟、紀伊の、男の水門に至りし時、命の傷ます〳〵よろしからず、つひにみまかり玉ひぬ。

「無念なりや、口惜しきや、彼の賊共の平定を見ずして、徒に命を失はん事。」と眦裂き髯打ちふるひ、御劍の欄碎けよと許り握りしめつゝ、雄たけびにたけび玉ひて、遂に歸らずなり玉ふ。げにやいかばかり口惜しくおはしけるぞ、千尋八千尋の海の深さも、此御恨に如くべしやは。天皇、血涙を揮つて、御骸を小龜山のほとりに葬り玉ひ、いかで兄命の未死の魂を慰め奉らざらんやと、叱咤し勵ましつゝ御軍をばすゝませられける。

男の水門より上陸し、名草の戸畔を誅し玉ひ、進んで大和に入らせ玉はんとせしが、賊勢頗る猖獗なるが上に、道嶮峻にして軍旅ほと〳〵進みなやみけ

れば、更に海路を廻りて伊勢の方より攻め入り玉はんとす。かくて御舟熊野の沖にさしかゝりし時、あはれ旻天抑何の心ぞ、暴風俄かに起り、海荒れて浪さかまく。御舟蕩漾木の葉のまふが如く、遂に覆へれるもあり、漂ひ去りて行衛を知らぬもあり、皇兄、稲氷命は新羅に、三毛沼命は常世國に漂流す。

三人の皇兄を失ひ玉ひ、天皇一人遠征の勞苦に惱み玉ひつゝも、眉宇高く昂りて英氣些とも弛み玉はず、或は叱咤して阻喪の兵をはげまし、或は温顏をもて困憊の卒を慰め玉ひつゝ、熊野の荒坂津に上陸し、敵地深く進み入りたまふ。こゝに丹敷戸畔と云へる土賊あり、道を塞へて抗戰す。天皇、親ら陣頭に立たゝして勢鋭くすゝませ玉ひしに、行先の榛莽の中より丈一丈ばかりもある大熊とびいで、道を遮つて隱れしが、此熊や毒氣を吹きけん、御軍悉く疫に襲はれて天皇をはじめ奉り、將卒悉くそこに打倒れけり。先に暴風、今また此疫病、あはれ旻天抑々何の心や。

たかるに、こゝに熊野の村長に高倉下といふものあり。此狀を見奉るや窃に打頷きつゝ、一口の寶劍を携へ來りて、倒れ玉へる天皇の御頭のあたりに振りかざしたるに、天皇はつとよみがへりたまひ、「いつ知らず、長寢をぞしつる。」と宣はして、其寶劍を執りて振翳し玉ひければ、前後不覺にたふれ居し軍兵共、皆魂を得てよみかへり、すく〳〵と立ち上りつ、新鋭の軍氣又更にさかんなり。乃ち疾風の如くたけりたち、短兵急に攻め玉へば、丹敷戸畔以下熊野の惡神共、忽ち射倒され蹴やぶられて、或は降り或は逃げ、皇軍の勝鬨熊野の深山にこだましけり。

天皇、大に高倉下の功を賞し玉ひ、「いかにしてかの御劍を得たる、いかにして斯くは仕うまつれる。」と問はせ玉ひしに、高倉下畏みて御答へ申し上げけるは、「臣一昨夜靈異しき夢を見たり。天照大神現はれ玉ひ、武雷の命を召して宣ふやう、彼の葦原中國に攻め入りし皇軍、今熊野にあり、かの惡神共

のあわざにより毒氣にうたれて惱める事甚だし、汝下りて助けざるやと、武雷命答へ申さく、夫には及び申さず、われに布都御魂と云へる靈劍あり、この靈劍を皇軍に授け申すべし、さらば皇軍自らふるひ立ち、賊自ら夷ぐ可しと。かくて武雷の命、次にわれに向ひて、「彼の靈劍を汝に托す、汝が倉の屋根を穿ちてそこより落し置く可し、捧げもちて彼の皇子に奉れ、嚴しきつとめぞ、ゆめ、怠りなせそ。」と宣ふかと見れば夢醒めたり。これ誠に正夢、靈劍果たして天降りてありければ、畏みて命を奉じてかくはつかうまつり候ひぬ。」と申す。實に大日輪ぞ背後に護ります、蒼蠅なす土賊何かあらんや、天皇深く感激して更に志氣を鼓舞し、威風凜々、すゝんで大和の峻嶮によぢ玉ひ、一舉に土賊を掃蕩し玉はんとす。

紀伊大和の堺は、險阻重疊、天にそばたちて雲をまとひ、未到の大深林の底、人跡榛莽荆棘、大谷の霧を罩めて暗く、大蛇の鱗ほのめき、巨熊の吼ゆる聲かすかも。皇軍、岩角に縋り葛によぢて、相はげましつゝ進みけるが、遂に方向を失して行く可き方を知らず。奪陣の氣はたけりたてども、此天險をいかにせんや。天皇おぼしなやみておはしけるに、八咫烏といへる者あり、翼を舞はして陣頭にたち、軍の先導をなしたてまつる。鳴建角身命とは此八咫烏の事也。

八咫烏の先導に從ひ、皇軍進み〳〵て吉野に入る。清流の岩に激して淙々と鳴れるは吉野川也。皇軍、そのほとりに屯し、水を掬して渴をいやしゐけるに、其川上に簗を懸けて魚をとれる者あり、獲たる魚を捧げて天皇に献じ、以ておん餞に充て奉る、土族の長贄持が子也。

なほ進ませ玉ふ程に、彼方の山本の井の中より、尻尾長き猿に似し者とびいで、はしりよりて天皇の御前にひれ伏す。その井より出づるや井の中より的礫なる光輝けり。天皇誰ぞと問はせ玉へば、國神井光と申す者、天神の御

子來りますときいて御供に仕うまつると申す。

なほ進ませ玉ふ程に、路傍なる山の如き大岩を排分けて出で來れるものあり、亦尾あり、尾うち振りて御前に伏し、畏みて申さく、われは國神岩排別也。天神の御子來りますと承り、かくは奉迎つかうまつると申す。

斯く、到る處の國神、皆御稜威に靡き伏して、われ先にと降伏しければ、皇軍ます〳〵盛にして士氣日に日に軒昂たり。道臣命、前衛となり、まづ路に當る小賊共を打ちはらひつゝ皇軍遂に大和の兎多に達したるに、土賊、穿邑の酋長兄猾といへるあり、敢て蟷螂の斧をふるはんとすときこしめすや、天皇先づ八咫烏を使者として、降をすゝめ玉ふ。あかるに兄猾は鳴鏑を放つて八咫烏を追ひかへし、益々備を固くして飽迄も反抗し奉らんとせしかば、天皇御軍をすゝめたまひしに、其軍容の堂々たるに驚き畏れて、兄猾が兵卒また戰はんとするものなし。兄猾、切齒し地たゞら踏めどもいかんともする

を得ず。乃ち一計を案じ、佯り降りて、新殿をあつらへ天皇を迎へて饗し奉らんとす。新殿の中におとし穴を設けおき、かしこくも天皇をおとし入れ奉らんとはかれる也。弟猾、忠順の意あり、來り屬して窃かに計をつぐ。道臣命、大久米命、走りて新殿にいたり、兄猾を捉へて罪を責む。兄猾あはてまどひ逃げまどひて、遂にわれと其陷穽におちいり、押機にうたれて死に果てき。

主將を失ひたる土賊共皆爭ひて降る。

弟猾、大に饗宴を擧げて大に皇軍をねぎらふ。天皇、うたひ玉うて曰く

宇陀の高城に、　鳴わなはる、
わが待つや、　鳴はさやらず、
いすくわし、　鯨さやる。

かくて、天皇兄猾を打滅ぼし玉ひ、高倉山にのぼりてみそなはせば、國見

岳の麓をめぐりて、賊兵共の屯せる樣、恰も大石に小螺の這ひ群がれるにも似たりけり。これ忍坂の八十梟帥也、天皇必らず打屠り盡し玉はんと期し、乃ちうたうて曰く、

神風の、　伊勢の海の
大石に、　はひもとほろふ
佃螺の、　いはひもとへり
うちてしやまむ。

こゝに道臣命一計を案じ、先づ梟帥共に親和の意を示し、盛宴をはりて招く。倨傲なる梟帥等、天神の御子の軍、またわれらに敵する能はず、こゝに欵待をつくすとなし、快然杯をあげて醉ふ。美酒已に甕に空しく、杯盤狼藉たり、放歌亂舞し止んで明滅する篝火の下に醉ひ倒れたる梟帥等、雷の如き鼾聲を放つて前後不覺となれりし時、道臣命、立つて高くうたへば、かねて

此合圖を待ちゐたりし部下の猛卒白刃を拔き連れて襲ひ擊つ。腥風一陣、無念の齒を嚙める梟帥等が首、血烟と共に刎ね上り轉び落つ。

さすがに、强暴を極め居たる八十梟帥さへ已に斯くの如くなれば、其他の土賊共、皆おそれおの〳〵きて降伏す。げに天神の御子の御軍こそ靈異なれと、彼の天日の光のまばゆきに弓ひくものなかりけり。

天皇、更に進みて磐余邑に兄磯城、弟磯城を討つ。此賊また頗る强盛、女軍を組織して女坂を守り、男軍は即ち男坂を守りて抗戰すこぶる力めしが、弟磯城は忽ち恭順の意をつげてくだる。天皇、推根津彥の計を用ひ玉ひ、夾擊して大に屠り、遂に兄磯城を斬り玉ふ。此時、皇軍大に捷ちたまへりしかども、輜重つがさりしかば、兵糧乏しくして大に疲れ苦しみき。天皇乃ちうたひたまはく、

楯並めて、　いなさの山の、

樹の間ゆも、　い行きまもらひ、
たゝかへば、　われ早や飢えぬ、
ゑまつとり、　うかひがとも、
今すけにこね。

かく歌ひ玉へば、輜重援兵直ちに至りき。交通の便あしき當時に於て、ゑかも地理さへ明かならぬ敵地也。懸軍萬里、いかに幾多の御辛勞を嘗めさせ玉ひけるぞや。

二、黄金の鵄——饒速日命

長髓彦は賊魁の最も大なるもの、當地の土豪の、雄中の雄なるもの也。天皇、さきに孔舍衛坂に敗れ、皇兄五瀬命は時に流矢に當つて痛憤してかくれたまひき。今や天皇、連戰連勝の勢に乘じ、大擧して一戰直ちに屠りつくさんとす。

いかで兄命の未死の魂をなぐさめ奉らざらんや。此役必らず治定の功をあげんと期し玉ひ、神祇をまつりてうたひ玉はく、

みつ〳〵し、　久米の子等が、
粟生には、　韮一と莖、
そねが莖、　其根芽つなぎて、
うちてしやまん。

更に、五瀬命を懷ひてうたひ玉はく、

みつ〳〵し、　久米の子等が、
垣本に、　うゑし薑、
口ひゞく、　われは忘れじ、
うちてしやまん。

げに天皇は軍將たると共に、またいみじき詩人にておはせりき。劍を拔いて陣頭に立ち玉ふ時、亦この朗々たる高調、以て御軍の志氣をはげましなぐさめ玉ふ。勇しき中にみやびを兼ねし日本武夫の典型を、畏かりけれ、實に此天皇に見奉るこそ。

長髓彥、一度皇軍を孔舍衞坂に討ちしりぞけ奉りしより、氣益々驕りて葦原中國はこれわが領、何者かまた此領をうかゞひ得んやと唯世を空しうしてぞありける。あかるに、皇軍土を捲いて重來し、威風の更に凛々たるを見て打ちおどろく事一方ならず、勢をつくして防ぎ戰ふ。地の利に精しく、兵もまた多ければ、勝ちほこりたる皇軍も、はた容易くは蹴破りがたく、激戰數日を重ねけるが、一日、戰まさに闌なるの時、一天俄かにかき曇り、篠つくばかりの雨濺いで、天地倏忽にして暗澹、いづれを味方、いづれを敵とも見え分かず、大刀うちまどひ弓ひきまどひて、小門の鳴門の渦卷く如く、兩軍た

だ入り亂れつゝ叫び合ひおらび合へり。あかるに其時、雲を破る一閃のきらめき、空をつんざいて天皇の弓弭の上に留まる。これ一羽の金の鵄なり、其光閃電の如く、賊兵の眼を眩じければ、賊兵戰ふを得ず、乃ち兵器をすてゝ潰走す。皇軍逃ぐるを追うて急に擊てば、賊兵の斃るゝもの數を知らず。

斯くて皇軍大に捷ち、賊勢日に日におとろへ行きぬ。長髓彥、使をつかはして申すやう、君、天神の御子と宣らせ玉へども、わが饒速日命も亦天神の御子たり、天神の裔豈二あらんや、畢竟はいつはり稱し玉へるのみ。若し果して、天神の御子に在はさば其證據ある可きを示し玉へとて示すに饒速日命の持てる天の羽々矢と步靫を以てす。天神乃ちまた夫と等しき天の羽々矢と步靫とをつかはして示し玉ふ。

誠や、天神の御子といふはいつはりならざりけり。饒速日命可美眞手命は驚懼する事限りなし。固く長髓彥に降らんことをすゝむ。長髓彥も心窃にお

どろくと雖も、騎虎の勢今にはかに止むを得ず、あくまで非を貫き凶を遂げんとす。

饒速日命、乃ち長髓彥を斬つて遂に天皇の軍門に降る。天皇優詔してゆるし玉ひ、尙、層富の縣の波哆、丘岬の江城戸畔、和珥坂下の居勢祝、臍見長柄丘岬の三處の土蜘蛛等の草賊共は偏師を派遣して剿滅し、高尾張邑の身體短く手足長き土蜘蛛等は蔦の網を結びて捕へ屠りつゝこゝに葦原中國初めて全く平定す。

饒速日命はいかにして、斯く夙に大和には天降りましけるぞ。思ふにこれ、公然と天照大神の御許を得て中國經略のはかりごとをなせるものなる可く、豐葦原中國は天神のゐろしめすべき國なりてふ觀念は、ふるくより此等草昧諸種族の間に存しゐたれば、長髓彥、即ち奉じて以て天下に號令せんとしたりしなる可し。天皇の御東遷ましますや、其道すがらの國神、宇津彥、宇佐津彥、高倉下、井光、磐排別、贄持等の天神の御子天降りましぬとて風をのぞんで降りしを見ても、此觀念のいかに有力なる根柢を諸種族の間に有したりしかをうかゞふに足らん。而して饒速日命は同じく天神の御子なれど、己の正嫡にあらざるを知りければ、速かに賊魁を屠りて皇軍にくだりけるなるべし。中國の平定は、實に自然の順序によりてなされける也。

二二、人皇第一代

天皇、悉く土賊を打ちほろぼし、葦原中國を平定し玉ふや、詔したまはく、「われ、皇天の威によりてこゝに群兇を戮し了んぬ。邊土未だ淸らず餘妖なほ梗れたりといへども、中州の地また風塵無し。乃ち宮室を經營して恭しく寶位にのぞみ以て元々をゐづめ、上は天神の國を授け玉ふ德に答へ、下は皇孫正をやしなひ玉ふの心をひろめ、ゐかる後に六合をかねて以て都をひら

き、八紘を掩ひて宇となすまた可ならずや。」

と。乃ち畝傍山の東南橿原の地に、底つ磐根に宮柱太しき立て高天原に千木高しりて皇宮を營ませ玉ひ、辛酉の歳二月十一日、はじめて天皇の御位に即き玉ふ。始馭天下天皇と申し、また、神日本磐余彦火々出見天皇とも申し奉る。

而して、可美眞手命及皇后のおん兄天日方奇日方命を以て、中食國政太夫即ち大臣となし、天兒屋命、天種子命、太玉命、天富命等をして各政事を分掌せしむ。まつりごとは祭なると共にまた政也。即ち祭政一致にして、祝祠を申し、罪をはらひ、皇天をまつり普く諸神をまつると共に、神意を體して蒼生ををさむる也。兒屋命は後に中臣氏となり、種子命は後に忌部氏の祖となる。

更に可美眞手命は內物部をひきゐて殿中をまもり、道臣命、大久米命は宮

門を護衛し奉る。これを物部氏、大伴氏、久米氏の祖とす。而して是等は概ね筑紫以來、皇室親近の諸族をして、各皆其職を世襲せしめけるもの也。

又大に功を論じ賞を行ひ玉ひ、宇津彦に大和國造を賜ひ、弟猾に猛田縣主をたまひ、弟磯城に磯城縣主を賜ひ、劍根に葛城の國造を賜ひ、其他、凡河內の國造、山城の國造、伊勢の國造、素賀の國造、紀伊宇佐等の國造を封じて地方の政をとゝのへ玉ひぬ。

斯くて御稜威の及ぶところ、西南は日向より彼の海神の國に至り、東北は常陸近傍にまで至りぬ。或はいふ、當時の王化は畿內附近の小版圖に止まりきと。然れどもかの鹿島香取の兩神社の創設が神代においてなれりしを見れば、東北の地、已に此時遠く開けしを知る也。且つ、天皇農政を勵まし玉ふや、天富命、木棉作日鷲命の孫を率ひ、諸國肥饒の地に分遣して穀麻を蒔きうゑ、自ら安房に至りて其處に其父太王命の社、今の安房神社をたてたると

云ふにても、寒烟荒草、アイヌ等が土窟のまどに傾く月をうたひけんこのわたりも、また大和朝廷の德光に浴せりしを知り得可し。

二三、秋津洲

天皇御即位の四年詔してのたまはく、

「わが皇祖の靈天より降臨して朕が躬を光し助く、今諸虜已に平らぎ海内事無きを得、以て天神をまつりて大孝を申ぶ可し。」と、乃ちまつりの庭を鳥見の山中にたて玉ふ。

天皇、敬神の念厚くましまし、曾つて戰陣の中にあり玉ひし時も、戰に先つて必らず親ら齋戒して神を祭り、戰終ればまた祭りて告げ玉ふを常としき。こゝに則ちこの擧ある也。前にも云へりし如く、是等の神は皆其祖先をまつるものにして、幻影にあらず偶像にあらず、きはめて人倫的の者也。「まつりて大孝を申ぶ可し。」とのたまへるを見よ。

三十一年の夏、天皇巡幸して腋上の嗛間の丘に上り國狀を廻望して詔ふやう、「美しき哉内木棉の眞迮國といへども、なほ秋津の臀咕めせるが如し。」と。此秋津の稱、後遂にわが國の全稱となりぬ。わが邦の稱呼は此外にも種々あり。伊邪伊岐尊は、稱して「浦安の國」「細矛千足の國」などとのたまへり。平安にをさまれる國、精鋭なる武器にとめる國といふ謂也。大國主命は、「玉牆内國」と呼び玉へり、四面海にてめぐらせるをいふ也。彼の「そら見つ日本」と云へるは、饒速日命天磐船にのりて天もりませる時空より見下し玉へるによりて云へるなる可き乎。其外、「大八洲國」「葦原中國」「瑞穗國」「長秋の長五百秋の瑞穗國」などとも云へり。又「敷島」といふは、後崇神天皇が都したまひける磯城の地名よりいでしなる可き乎。

七十六年の春、天皇崩じ玉ひ、畝傍山の東北なる陵に葬り奉る。

あはれ、あはれ、偉なる哉神武の御名や、

二四、佐井川の畔

神武天皇先に阿多の小椅君の妹阿比良媛を娶りて、多研耳命と岐須耳命とを生み玉ひしが、更に嫡后を得て内助の力をいたさしめんとす。時に久米命奏す、「大和に神の女一人おはしませり、母は勢夜鞴媛、事代主命朱塗の矢となつて媛とちぎり生ませ玉ひし御子なり。姫鞴伊須氣余里姫と申し、美しく氣高く、はた賢くおはしませり。いかにおぼし玉ふぞ。」

天皇、乃ち久米命を伴ひて、その小女見んとて高佐志野を逍遙し玉ふ。時正に春たけなは也、空うら〳〵と晴れ渡りて小鳥の囀りのどかに、綠遠く烟れる若草の小野は、繪具溶せるが如く八千草の花に彩られつ、飜へり〳〵行く胡蝶の行衛も夢のやう也。春風の吹くがまに〳〵歌の聲きこゆ。やがて彼方の丘の邊に七人の乙女出で來ぬ、長き袂打ちなびけつゝ、茅花など拔きつつ行く。久米命うたうて曰く、

やまとの、　たかさじ野を、
七人行く、　乙女ども、
誰をしか覓む。
天皇うたひたまはく、
かつがつも、　いやさきだてる、
えをしまかん。

即ち彼の七人の最も先なるこそよけれとのたまはす。げに先なるや、神の女、伊須氣余里姫なりき。久米命命を傳へんとてすゝみよりしに、姫、此命の眦裂けしを見て、

あめつゝ、　ちどりましとと、

などさける利目。

と云ふ。命、直ちに答ふ。

をとめに、　直に逢はんと、

わが裂ける利目。

剛勇無双の老將軍と、艶麗花の如き美人と、而してこの一場の諧謔と。君に逢はんとてわが眦はかく裂けり、さて君を覓ぎ玉ふ天皇の命を奉じて參りぬと申しければ、姫はちらひつゝも畏みて命を奉じぬ。姫が家は佐井川といへる川の畔にあり、此川のほとりには百合の花多かりき。其眞白き花瓣は、朝の星影に仄めき夕の月影にひるがへつて、芳芬姫が黑髪にかんばしかりき。百合の古名はさゐと云へり。而して此姫の生み奉りしを、第二代の天皇綏靖天皇とす。

二五、手研耳命の亂

神武天皇崩じ玉ふや、御子手研耳命、不法暴戾の行多くまし〳〵、皇太后を苦めまつり、おん弟神沼河耳命神八井耳命等を殺さんとはかり玉ふ。皇太后伊須氣余里姫打ちなげきつゝ歌ひ玉はく、

佐井川よ、　雲立ちわたり
うねび山、　木の葉さやきぬ
風吹かんとす。

神沼河耳命、おん兄神八井耳命と、手研耳命の熟睡せるを襲うて殺し玉はんとす。先づ神八井耳命弓矢手挾びて覗ひよりしが、手足おのゝきてとげ玉はず、神沼河耳命、奮然立つて遂に射殺し奉る。こゝに於て天下はじめて事無きを得たり。神沼河耳命乃ち神八井耳命に寶位を踐まん事をすゝめ玉へど

も、謙德高くおはせる兄命はのたまはく、「われ兄なりといへども、心弱くして天下の事に當る事あたはざりき。いかんぞ至尊の位に即くを得んや。汝こそ。」とて、位をおん弟の命にゆづり玉ふ。

神沼河耳命、よりて御位に即かせ玉ふ。

二六、崇神の朝——四道將軍

第三代安寧天皇、第四代懿德天皇、第五代孝昭天皇、第六代孝安天皇、第七代孝靈天皇、第八代孝元天皇、第九代開化天皇。此御歷代の間は、天下極めて靜謐にして萬民皆昌平を謳歌せりき。されど此等御歷代の天皇は、決して無爲の治に安んじ玉ふ事なく、神武創業の後を承けて經綸おさ〳〵おこたりなくましましける也。

第十代の天皇を崇神天皇と申す。此君すこぶる英明にして治蹟に富ませ玉ふ。磯城に都し玉ひて瑞籬の宮と稱す。

詔し曰はく、「惟ふに、わが皇祖諸天皇の宸極に光臨し玉ふはあに一身の爲めならんや。けだし蒼生を安んじ、天下を經綸したまはんがため也。故に代代玄功をひらき至德をしき玉へり。今朕、こゝに大運を奉承す。なんぞまさに皇祖の遺訓に遵ひて、永く無窮の祚を保たざらん。夫れ群卿百僚、須く爾の忠貞を捧げて、並に天下を安んずるにつとめよ。」と。以てその御抱負を覗ひたてまつるべし。十代四百八十年間の昌平の後を受け更に積極的の態度を以て鋭意國運の發展をはかりたまはんとする也。

前章にも繰返せるが如く、上古に於ける政治は、祭政一致即ち神意政治也。政事に心を用ひ玉ふ事深き天皇が、その御號の示す如く崇神の念深くおはせる、決して偶然にあらざる也。

はじめ彼の三種の神器は、殿内に安置し奉りけるが、天皇、神人已に相懸

隔して、みだりに神威を褻瀆するものあるあらんと懼れ、新に鏡劍を模造して之をとゞめ、皇女豐鍬入姫をして、奉じて倭の笠縫邑にまつらしむ。後、垂仁天皇の時、御鏡をわかちて倭姫命に託け玉へり。倭姫命、鎭坐の地を求めて、菟田の篠幡に至り、更に還つて近江に入り、美濃の東を廻りて伊勢に至り玉ひしに、天照大神誨えてのたはく、「神風の伊勢の國は、常世の浪の重浪よする國也、傍國のうまし國なり、是國におらんとす。」と。姫すなはち五十鈴川のほとりに地を相し、荒草木根苅拂ひ大石小石とり平げて底つ岩根に宮柱太しき立てゝいつきまつる。これを磯の宮といふ、即ち內宮也。後雄略天皇、丹波より食物の神豐桶大神を遷しまつりて外宮とす。伊勢大神宮はかくて成れる也。神路山のかすみ高天原に立ちつゞき、御裳濯川の流れいく萬代の末にせゞらぐ。畏き哉。

かくて、天皇銳意政事に心を用ひさせ玉ひしが、ある年疫病流行して蒼生の苦しめる事はなはだしかりければ、天皇痛く御心を惱め玉ひつ、神淺茅原に行幸して、大物主命をまつり、又倭の大國魂神をまつり、其外八百萬神々をまつり玉ふ。而して神地神戸を定めて供神の用度にみて、又天社國社等を定む。天社は天神を祭れる社にして、天神とは即ち天より降りませる神、伊勢、山城の鴨、住吉、出雲等これ也。國社とは此國土に生れし神々をまつれるものにして、大三輪、大倭、葛木の鴨、出雲大名持神等はこれ也。

かくて民の憂を憂として、身を責めて神に祈り玉ふ御仁德の厚きに、疫病も忽ち去りて民草は皆御惠の露にうるほひつゝ、此葦原中國日にけに開き行きけれども、都に遠きわたりは未だまつろはぬ者少なからず。天皇、今や進みて、夫等の者を打從へ、以て我が建國の大精神を宣傳したまんと思し、乃ち、大彦命を北陸に、其子武淳川別命を東海に、吉備津彦命を山陽に、丹波道主命を丹波に派遣し玉ふ。これ謂ふ所の四道將軍也。天皇詔して、敎を受

けざるものあらば兵を擧げて擊てとて各々賜ふに節刄を以てす。征服といはんよりも宣傳なり。討伐といはんよりも教化なり。精神やもとより平和にありといへども、止むなくんば武力を以てせざる可からざる也。

大彦命大命を奉じて、征衣の袖を打靡けつゝ、遠く北陸の空に向はんとす。都をいでゝ和珥坂の上にいたりしに、路傍に一人の童女あり、繰返し〳〵謳ふをきけば、

御間城入彦はや、　おのがををしせんと、
ぬまく知らに、　ひめなそひすも。

御間城入彦は天皇の御名也。その命とらんとはかれるをも知らで、あはれ危しといふ也。大彦命歸りて此由を奏しけるに、天皇の姑君、倭迹々日百襲姫命案じ玉ひつゝ、これ叛者の天皇に危害を加へんとするなり。武埴安彦こそ叛かんとしつれと云ふ。天皇、他の將軍をも止めて、ひそかに變にそなへませしに、果して埴安彦、妻吾田媛と共に叛し、安彦は山背より、吾田媛は難波より都へ攻め上りぬ。天皇、五十狹芹彦命をつかはして吾田媛を討ち直ちに之を斬る。又大彦命と彦國葺命とをつかはして埴安彦を討たしむ。皇軍知珥武操坂より進みて那羅山にたむろし、輪韓河を挾んで大に賊兵と戰ひ、遂に安彦を斬る、輪韓河又の名を挑河といふは、此役に兩軍の激しく挑み合へるを以てなり。武彦何の心ぞや、此聖代に生れて敢て不軌を計り、わが朝叛臣の第一人者となる。おもふに英斷の下必らず不平あり、天皇の進取邁往の政策に激成せられし一の弱く微き反動の兒なりけん而已。

四道將軍は發遣せられぬ。大和朝廷の御稜威は遠き邊土の彼方までも輝きて、國勢はこゝに一大發展を遂げたり。西は筑紫、東は少くとも今の、岩代磐城あたり迄もその勢力は及びしなる可く、彼の會津といへる地名は、北陸に向へる大彦命と東海に向へる其子武淳河別命とが出會ひたるによりて起れ

るなり。露營の月に戈を枕の幾春秋、雲の幾重に故郷の空ふりさけ見ては、丈夫もはた傷ざらんや。萬里遠征の情、はしなく逢ひし父と子と、いかにうれしき會津なりしぞ。

斯くて四方の國々をさまり、四氏の裔擴がりて土地開け人口殖えたり。加之、今の朝鮮の地なる加羅の國、亦天皇の威名をしたひ、王子都怒我阿羅斯等をつかはしてわが保護國たらん事を請はしむるに至りぬ。されど、阿羅斯等來りて穴門に至るや、日本國王と自稱する伊都々彦に抑留せらるゝ事多日、其の北陸をめぐり出雲を經て、辛うじて大和にまゐり上れる時は、天皇已に崩御の後なりき。乃ち垂仁の朝に仕へしが、天皇の御名御間城入彦に因みて、任那といふ名を得て、以て國號となせりと傳ふ。なほ、他に傳ふるところによれば、任那の皇子蘇那葛叱知來朝して、天皇に仕へ、また彼國の使來りて國亂をつげければ、鹽乘津彦をつかはして綏撫せしめたりきと、いづれにせよ、天皇の御盛德の遠く海外にまでも及べるは明らかなる也。

天皇、また農政に心を傾け玉ひて、詔に「農は天下の大本也、民の賴りて生くるところ。」の御詞あり、池溝を拓きて灌漑に便する等つとめ玉ふ事多かりき。かくて産業すゝみ民富みければ、はじめて調を課して施政の費途に供へたまふ。男には弓弭の調とて野山の獲物より、女には手末の調とて手業より各其幾分を捧げしむ。この一事を見ても御治蹟のいかにあがれるかを見るべし。

天皇を稱して、御肇國天皇と申したてまつる事、なほ神武天皇に於ける如きもの、誠に宜なる哉。

二七、沙本媛皇后

垂仁天皇も亦英明なる君にておはせりき。よく、父天皇の遺業を繼ぎ玉ひ、

共に日本建國の途上に一時期を劃し玉へり。敬神の念深くおはして、伊勢神宮を建て玉ひ、又農事に意を用ひて池溝を拓き玉ふ等、功業頗る多くおはせり。

なかも、此朝に於て一の悲劇は宮門の中におこれり。

天皇、皇后を沙本媛と申す。美しく優しくおはしければ、天皇斜めならず御鍾愛ましけるが、皇后の兄に沙本彦と云へるあり。邪惡の人、窃かに非望を抱きゐたりしが、一日、皇后に問うて曰く、「夫と兄と、御身は何れを愛する。」

媛、突然の問、いと心得ぬ事に思し玉ひしが、何心無く、「そは兄也。夫はもと他人、何ぞ血を分けし兄君にしく可きや。」と答へ玉ふ。沙本彦氣味惡き會心の微笑を片頰に浮べつゝ、膝押進めて何事をか媛に呟く、媛の頰は見る見る青褪めて、物の怪に襲はれたる如く打戦けり。何とや、帝を弑しまつれとや。

媛は只、恐怖に慄ふ眼に、じつと兄の顏を見つむるのみ。

「いかに、肯き玉ふ可きや。」沙本彦は八鹽折の紐刀を媛にさしつけて言葉鋭く迫る事急也。媛は言葉もなしに、首垂れて細き肩打慄はしてあり。餘りといへば理無き仰せかも、なんぞ、寧ろ死ねよとは宣はせぬぞ。

「肯き玉はずば、わが身は破滅ぞ、いかにや。沙本彦の言葉、蛇の胸を嚙むが如し。媛は只唇を嚙みて言葉なし。「いかにぞ、兄を殺す可きか、はた夫を殺すべき乎。」沙本彦の言葉は更に匕首となつて直に心臟を刺す。媛は青褪めし頰を屹度ふり上げぬ。「承りぬ。」と幽かに答へし時、涙は血と化つて流れたり。あはれ脆き者よ、爾が名は女なりき。

なんぞ、寧ろ自ら死ねよとはのたまはせぬぞ。我事成れりとほくそ笑みつつ沙本彦の歸りし後、媛は其紐刀を以て、われとわが悶えの胸をさしつらぬ

かんかとも思しまどへるなり。

殿前の萩が花叢さら〳〵と風に鳴つて、白露に咽ぶ虫の音に夜は靜かに更け行く。天皇は媛の御膝を枕にして睡り玉へり。こゝは久米の高宮。侍衛の者共も皆夢にや入りけん、燭の影、ひとり連りに瞬く。

媛の手には彼の紐刀ありき。

弑し奉らずば、兄沙本彦はいつしか帝に誅されぬ可し。さりとて、畏しや爭で帝を。げに畏しとも畏しや、いかで此帝を。あはれ斯く安らかにわが膝にねむりませるをや。

所詮は自ら死ぬの外に道無かりき。斯く思ひ定めても、なかすがに弱き心のとつおいつ、覺えずはら〳〵と落ちかゝれる涙天皇の御顏に降りかゝる。天皇、つと覺め玉ひつ、「あな、夢なりし哉、誠に夢にてありし哉。」と四邊見廻しつゝのたまふ。媛、慌てゝ手なる双を押し隱しつゝ、「いかなる夢か見そなはせる。」と戰く聲を激まして問ふ。「げに怪き夢を見たり、沙本の方より驟雨降り來てわが顏を沾せしかば、急ぎ歸らんとしけるに、何處よりか錦色の小蛇來りてわが頸に卷きつきぬと見て覺めぬ。」かくのたまひて、天皇、何の兆ぞといぶかしげの樣也。媛、今はとてありしよしを具さに奏上し、泣き伏して罪を待ち玉ふ。

天皇、沙本彦の逆意を知り、大に怒り玉ひ直ちに兵を遣はして攻めしむ。沙本彦、稻城を築いて守る。

沙本媛、兄と死を殉にせんと思し決し玉ひ、密かに宮を拔けて沙本彦の城中に紛れ入り玉ふ。媛時に妊身玉ひしが、寄手の將軍八綱田がかけし火に城炎々と燃え上りし時、玉の如き皇子誕生ましまし。媛、人をして天皇に告ぐ、此皇子、なほ天皇の御子として慈しみ玉ふべくば、城門の邊まで迎への者を遣はし玉へ。と。天皇、沙本彦の叛をこそ憎め、媛はもとより鍾愛深き皇后

におはす。「御子のみならず、媛も共に掠め來よ、若し拒まば、髮ひき手ひき率以て來べし。」とて力士をつかはさる。媛、豫めかゝらんと期し玉ひければ丈なす黑髮ごそと落して、その儘に頭を掩ひ、腕輪の玉の緒も御衣の袂も、酒に浸し腐らし觸れなば斷るゝばかりにして待つ。されば、力士遂に媛を率行く事能はず、僅かに皇子を獲て歸る。媛、燃え迫る火に燒かれて、今や死に玉はんとする時、天皇に使して、其皇子の御名を火元中分と命ぜん事を請ひ、また申すやう、「妾死すと雖も、天恩いつの世にか忘れん、願はくは千代に八千代に幸くませ。妾が掌りしところの后宮の事は丹波道主の王の女に授け玉ふ可し。必らず貞淑ならん。」と。かくて炎に卷かれて兄沙本彦と共に逝く。天皇哀惜して熱涙止め合へ玉はず。

あゝ、沙本媛皇后。夫にも背く能はず、兄にも背く能はず、遂に一身を犧牲として果て玉ひぬ。これを婦道のかゞみと云ふ可くば、あまりに悲愴なる御最期にあらずや。脆きものよ、げに汝が名は女なりけり。

此悲劇中に生れませる皇子、譽智別王子にも哀深き物語殘れり。此皇子、母沙本媛に似て容貌麗しくおはせど啞にてましまし。さかるに一日空渡る鶴の姿を見て聲をあげて呼び玉ひければ、天皇、かの鶴を見せばや口利くと思し、山邊大鷹に命じて捕へしむ。大鷹播磨丹波より尾張信濃の國々まで、空より空へ追ひ驅けりてその鶴を捕へ王子に奉まつりけれど、王子遂に口きき玉はず。天皇御心傷めておはしけるに、靈夢の御告によりて出雲大社を改修し、皇子を詣でしめ玉ひしかば、やうやく口利き玉ふやうになれりき。薄命の母が生める薄命の皇子よ。

二八、野見宿禰と田間守

此頃殉死の風行はれき。人の死ぬるや、其人の生前用ひ居し玉飾、劍太刀、

弓矢、其他の器具などを共に埋むるならひ、貴人に於ては更に其用ひ居し僕婢をまでもおかするを常とせりし也。

天皇の御弟、倭彦命薨じたまひし時多くの人々を殉死せしめき。天皇、霜迷ふ夜の空に、風の絶間々々を響き來る哭聲を耳にしたまひ、何事ぞと問はせ玉ふに、これ殉死の人々の聲なりと答ふ。慈愛深き天皇、深く哀み傷ませ玉ひ、堅く殉死の風をとゞめ玉ひぬ。後皇后日葉酢姫の崩れたまひし時、野見宿禰の策を用ひ、埴輪といへる土偶をつくりて墓側に立たしめ、以て人に代ふるの制を立てたまひぬ。宿禰、出雲國より呼べる人形造を率ゐてこの任に仕へければ、姓を土師と賜ひき。

野見宿禰は元出雲の者なりしが、其頃大和に當麻の蹴速といふ者あり、我こそは世にならび無き大力なれと自ら誇稱し、狼藉の行のみ多かりければ、天皇詔して、蹴速とよく力を角せんとするものを求む。其募に應じてまゐりたるが此宿禰なり。宿禰、天皇の御前にて蹴速とすまひ、見事に蹴速の脾腹を蹶破りてうちころしければ、天皇いたく稱したまひて、蹴速の舊領を其儘に宿禰に與へて朝廷につかへしめ玉ひし也。わが國技と稱せらるゝ角力は、實に此野見宿禰と當麻の蹴速とよりはじまれり。宿禰は今に、角力の祖として敬はる。

天皇の御代、亦國勢大に張りしかば、新羅の王子天日槍風をのぞみて歸化し、玉、刄、鏡等を奉る。其子に田間守と云へるあり。天皇の命を奉じ、不時香果をもとむ可く常世國に船出しぬ。不時香果は蜜柑のたぐひなる可く、常世國は南洋の島々、此行や即ち南洋の探檢なりしなる可し。田間守、行衛も知らぬ八重の潮路を、風のまに〳〵漂ひつゝ、珊瑚の岸、椰子の磯曲を經廻りて漸く香果を求め得つ、喜び勇みて歸りしが此行往復十年を要したり、不時の香果は求め得つれども、不時の人の命は世にあらず。天皇はすでに崩

御して幾年、御陵の草と共に恨みぞ長きや。田間守、香果を捧げて墓前に慟哭して死にぬ。これより此實わが國に傳はりしが、田間守の名をとりて橘と名づく。

二九。西邊經略

垂仁天皇の御子御位に即き玉ふ。これ第十二代景行天皇也。

天皇、八十人の皇子皇女おはせりき。その中、日本童男命、稚足彦命、五百城入彦命の三人を太子とし、他の七十七王は、悉く諸國の國造、別、稻置、縣主等に分封し玉ふ。これ中央皇室と地方との脈絡を保ちて、各其地方を治むる政策的機關にして、中央政府の勢力を地方に重からしむる方法也。而して後世諸國の和氣姓は、即ち其別れ王の苗裔なりとす。

天皇の朝、熊襲叛す。此朝邊境騷擾して戎馬すこぶる多事なりしと共に、また更に王綱の擴張に一歩を進めたるの御宇也。

當時の國勢を見るに、大概三部に分れたるを見る。東北は信濃上野間の山脈を境界とし其以北は、未だ十分に皇化に沾はざる蝦夷種族の地にして、西南は九州を一島として本土との交通多からず。よし、海外民族の驛を重ねて來貢せしもの少からざりきと云へども、彼の加羅之國の使節を抑留せし伊都都彦なるもの〻穴門附近に據れりしを見ても知らるゝが如く、西偏の地一帶、不逞の徒皇權を無みして暴威をふるふ者多かりし也。又其頃築紫の伊都には、比彌呼なる女性土豪の據れるあり、伊都の國は居然として一大王國の觀ありき。すなはち、崇神垂仁兩朝の皇化は專ら中央日本の地をいでざりし也。

熊襲とはいかなる種族なりけん、素より天孫民族にあらず。今の大隅あたりを根據として跋扈し居たりし蠻野の土民なりしなる可く、その熊の如き強暴なる振舞によりてかくは呼べる也。神武東遷以來、こゝに八百年、天孫降

臨の地、今や却つて草味に歸す。天皇こゝに慨然として征討の師を出だし、纒向の日代の宮より築紫を指して大蹕をすゝめさせらる。

年の九月周防の娑磨に到りたまふ。時に天皇、南方の空に烟氣の騰れるを見そなはして賊の存在を知り、人をして偵察せしむ。女酋長神夏磯媛といへるあり、速かに恭順の意をいたし、使者を遣はして皇軍を迎へ奉る。天皇、神夏磯媛の告ぐるところにより、鼻垂、耳垂、麻剝、土折、猪折等の四種の土賊共の蒐佐の川上、御木の川上、高羽の川上、綠野の川上に在りて、徒黨をつどへ、山川の要害をたのみて皆皇命にゐたがはずときゝ玉ひ、襲ひて直ちに屠りつくす。夫より豐前長狹の縣にいで、碩田に至れば、速見邑の女酋長速津媛、亦恭く天皇の御蓋を迎へ、直入縣附近に、青、白、打猨、八田、國麻呂等の土蜘蛛ある事を奏す。天皇、奇兵を放つて一舉にしてつくし玉ふ。夫より高屋の行宮におはして附近を經略し玉ひしが、兒湯縣に幸し丹裳小野に遊びたまひし時、東方を望みて左右に謂ひ曰はく、「此國や、日の出づる方に直に向へり」と。日向の名こゝに起る。

さて、いよ〳〵熊襲を討ち玉はんとす。熊襲、國廣く兵強く、萬里の懸軍に疲れし寡兵の容易く抗り難きを見玉ひて一計を案ず。熊襲梟帥に二人の女あり、姉を市乾鹿父、妹を市鹿父といふ、いづれも勇にして美なり。すなはち窃かに市乾鹿父を召して賜ふに寵を以てし、はるかに賊徒の討伐を以てす。市乾鹿父、命を奉じて歸り、父梟帥にからき酒を呑ましめ、その寢たるをうかゞひて弓弦を斷ち、急に從兵をして襲ひころさしむ。梟帥誅に伏するや、賊徒四散し熊襲忽ち平らぐ。

これ市乾鹿父の功なり。されど父を害せし不孝憎む可しとなし、天皇これを嚴に罪し玉ひぬ。彼女や王土の果てに育ちて、蠻烟にかすめる月を眺め瘴霧にけふれる花を愛でし身、何ぞまた人倫の道をあきらめ知らん。あはれ、

哀しかりけり、彼女が志や。

かくて熊襲平定の功を奏したまひしかば、還御の途につかせ玉ふ。夷守にいたり諸縣の女酋長泉媛の大饗を受け玉ひ、進んで熊縣に至りませば、こゝに熊津彦兄弟あり、兄熊は直ちに召に應じて降りしが、弟熊應ぜず、乃ち討ちて誅し玉ひ、海に浮びて葦北の小島を經、火國にいたりませり。時に日暮れぬ、天地の闇濃く塗りて、御船寄すべき方も見えわかず、ゝばらく沖の方に漂ひておはせしとき、はるか彼方に當りて、浪のうね〳〵ちらめきいでし一點の火あり、やがて二點となり、三點となり、遂に幾百千萬點なるを知らず。飛び交ふる螢の如く、亂れ、交り、搖れ、動く。その火をゝるべとして御船を進め玉ひしに、事なく岸につく事を得たり。これ八代の縣の豐邑也。而して此火の何物の火なるを知らず、不知火といへるはこれ也。此國を稱して火國といふは、これより起る。更に高來の縣より、玉杵名に渡り、其地の土蜘蛛津頰を殺し、阿蘇に至り、阿蘇津彦、阿蘇津姫を降し、御木に至りて高田の行宮に在ますことゝばらく。八女の山中の仙境に、美しき女神八女津姫をおとづれ玉ひて、夫より再び豐前國にいで、かちどき勇ましく都へかへり玉ふ。

此行や前後七年、ことごとく築紫の賊徒をゝづめ玉ひ、西偏の民をしてあまねく、皇化に浴せしむるを得たり。其歸途はむしろ御巡幸なりき。玉輦搖搖、雲に入り霞をいづる長程幾百千里、天孫降臨の地、再び纒向の日代の宮のすめらみかどの、御稜威の風になびきふけん事ぞ目出度くも又畏きや。

三〇、日本武尊

ゝかるに、此後八年、熊襲また叛けり。

此度、征討の大任にあたり玉へるを、日本武尊とす。

日本武尊は、素盞嗚命と共に、わが上古史中の大天才也。情熱的英雄、は

た悲劇的英雄也。其事業のいかに偉大なりしと共に、其生涯のいかに波瀾と色彩とに富みたりしかよ。今や、この我が建國史の筆を擱かんとするにあたり、余をして、あばらく此華々しくも悲壯なる英雄の悲史活史を傳せしめよ。

此尊、また日本童男とも申しき。御兄大碓命と双生にておはしければ、小碓命とも申し奉る。父天皇の精悍の血を受けたまひて、勇武絶倫、身の丈一丈を過ぎ、力よく鼎を扛ぐ、あかも容姿端正、紅顏花を欺く美少年也。時はじめて十六歳、撰ばれて熊襲討伐の大任を授けられ玉ふ。從ふもの、美濃に聞ゆる弓の名手弟彦以下わづかに數人を出でざるなり。

其將に發せんとするや、日頃此皇子を愛で慈しむ事並々におはせざりしおん叔母倭姫命、征途の恙無く、武運の幸くおはさん事を祈りつゝ、はなむけするに、女衣裳一領と小釵一口とを以てし、涙に充ちたる微笑を以て勇ましき門出を激まし祝し玉ふ。尊、ちかつて賊徒を屠りつくさんと壯語し玉ひ、威風凛々として纒向の宮を辭し、遠く筑紫の波を踏んで、蠻夷の中に身を投じ玉はんとす。此垂髫の將軍、意氣すでに西海を呑める也。

行く〳〵、地方の小賊共を打ちしたがへつゝ、年の十二月熊襲の國につかせ玉ふ。

尊、姿を窶して身をしのばせ玉ひつゝ、其國の樣を覗ひ玉ふ。

偶々巨魁川上梟帥、新室の成りしを祝ふとて、親族家族を集へて、長夜の宴をはり、酒くみ交して興じざはめき合へり。尊、乃ち髪を後に結びさげ、叔母命の玉ひし女衣裳をつけたまひ、窃かに女どもの群に交りて宴席に侍し居玉へば、瓦中の珠のかゞやきは彼の赤かゞちの如くなれる梟帥の醉眼にも映じたりけむ、「あはれ美しき乙女こそあれ、いづこの里よりかまかれる、進みよりて酒汲め、」と手を引きて傍近くぞはべらせたる。尊、鬼をもひしがんず猛々しさを、俯目面映ゆげなる乙女の嬌態につゝみつゝ、波々と梟帥が杯に

酒を濺ぐ。好色の梟帥、美しき尊が姿に心魂を蕩かしはてつ「乙女美しければ、酒、なんぞうまきや。」と杯を重ぬる事しきり也。

かゝる程に、梟帥正體もなく醉ひ倒れて、鼾聲雷の如し。醉ひしれたる者共、ふと覺めては、夜の更けたるに驚きては、皆蹌踉として三々五々かへり行けり。倒れたる甕、碎けし瓮、狼藉と亂れたるが中に、殘れるは梟帥と尊と唯二人のみなり。赤黑き篝の光、眞菰の帳吹く風にゆらめいて、壁に映れる物のかげも懶氣に動く。

梟帥は何を夢むらん。日本一の武勇の君とはゆめ知らなく、尊の御膝の上にその鬚髯蓬々たる頭をのせつ、棘の如き面、鼾聲と共に酒氣を吹いて、搖れども動かせども覺めんとする氣配無し。彩の袂をかなぐりやりし尊の手には晃々たる七首きらめけり。さつと靡ける黑髮の中より、電光一度閃めくよと見れば、梟帥が胸はぐざと裂かれて、迸れる血、新室の戸にしぶいて紅

纈纈焉。呀と一聲太く呻いて、豁と見開ける梟帥の眼にうつれるは彼の美女の姿にあらずや。こは、夢か、雄たけびして立上らんとする時、七首二度閃めきて深く喉を抉りぬ。

尊、なほ刺し貫かんと振翳し玉ひし七首の下より、梟帥苦しげに叫んで曰く、「暫らく待たせ玉へ、些しく申度き事あり。――君は抑々何人にておはし玉ふぞ。」

尊、ゐかと膝下に押へつゝ申しきけ玉ふやう、「われは、纒向の日代の宮におはす、大八島國治ろしめす、大足彦忍代別天皇の御子、日本童男ぞ。汝等不逞の輩、朝威をなみし奉るときゝ、天皇、われをつかはして誅せさせ玉ふなり。今こそは思ひ知りけめ、いかにぞや梟帥。」と宣らせ玉ふ。

梟帥、「まことに然るべし、畏き大君の御子や。此築紫の内、われにまさりて強き者なし、ゐかるに倭には我にもまして強き君おはしける乎。あはれ大

君の御子、我が賤陋の口を以て、御名をたてまつるをゆるし玉ふ可きや。」と申す。尊許し玉へば、梟帥、今は絶々の息の下より、嗄れゆく聲を打勵ましつゝ、「君こそは實に日本に二なく强き君なれ、日本武尊と申したてまつらばや。」かく云ひ終りて、梟帥遂に息絶えたり。これよりぞ、此尊を日本武とは申すなる。

かくて、尊單身敵營に入りて、先づ巨魁を斃し給ひければ、さしもに獰惡なる熊襲共、おのゝき怖れて、一矢をも奉らず尊の御前にひれふし、熊襲、こと〴〵く平定しぬ。げに、いみじかりける命が御勳功や。宜なり、日本武の御名や。

尊、なほ歸途所々の土賊を打從へ玉ひぬ。

海路より吉備にわたり、此わたりに跋扈せる賊を討滅して水陸の妨害を除き、進んで出雲に入れば、出雲建といへるあり。尊を少年とあなどり、無禮の振舞多かりき。尊一計を案じ、建を誘うて共に肥の川の水に游ぐ。かくて窃に岸邊に解ぎ捨ておける建が太刀と、己の太刀とを換えおき玉ひし後、建に挑みて相闘はんとす。建、太刀を拔かんとすれど、鞘固くして拔けず、あせりうろたへてある中に、尊、勢鋭く斬りこみたまへば、おろかなる建手もなく誅に伏しき。いかに其慧敏にして智謀に富ませ玉ひしかを見よ。

尊が都に歸りて、熊襲平定の狀を復奏したまひしは、出發以後一年にすぎず。疾風の如く掃蕩し、雷霆の如く破碎す、此紅顏の將軍が劍を振つてすぐるところ、山川草木みな靡き伏して、西偏の騷擾たちまち止む。天皇いたく其功を賞し玉ひぬ。うれし涙流して喜び迎へ給ふ倭姫の御前に、長途の疲れも見せ玉はず、袂を拂つて莞爾とせる尊の武者振のいさましくもまたらうたかりし哉。

三一、日高見國

景行天皇、天下を一に統べんと思し玉ふ事多年也。二度の御討征によりて、西海悉く歸服するといへども、東方未だ化に浴せざるを慨し玉ひ、熊襲征討後六年、武内宿禰をつかはして、北陸及び東方諸國の地形を察せしめ、かつ土人の狀を巡視せしむ。宿禰は孝元天皇の御孫、屋主忍男武雄心命が、命を奉じて紀伊の群神をまつりて其地に止まれりし時、木國の國造、宇豆彦の妹山下日朝の媛を娶りて生める子なり。宿禰とは小兄、即ち近臣の意なり。宿禰、忠誠にして才幹ありき。曾つて天皇、群臣を招きて宴を賜ひしに、ひとり宿禰の姿を見ず、人をしてたづねしめしに、宿禰殿の外面に、ひとり矛をさゝげてありけり。天皇召し玉ひて「何故に汝ひとり外にありしや。」と問ひ玉ひしに、宿禰、御答へ申して曰く、「御稜威あまねき御世なりとも、何れの處にか、逆心をいだくものなきを保せじ、萬一さる者のあらんほどは、斯くうたげ興ずる折にこそ乘じて事は圖るべけれ。故に、臣ひそかに警戒しつゝありし也。」と。天皇深く其忠誠に感じたまひ、厚く用ひたまふに至りし也。

宿禰、巡視して還り復命して、「東夷の中に、日高見國といへるあり。國人、男女並に髪を被りて文身せり、其性頗る勇悍、總稱して蝦夷と云へり。其地や沃壤にしてよくみのり、原野遠く天につらなれり。伐つてとる可き也。」と奏上す。

日高見國とはいづくなりし乎。或は信濃也といへども、崇神の朝において、既に、彼の大彦命、武渟川別命等の勢力の、遠く信濃以北に及べりしを以て見れば、而して宿禰の此報告が全く是迄に知られざりし新しき地に就いてなされしものなるを以て見れば、日高見國といへるはおそらく陸前あたりなりしなる可し。まことに此わたりは謂ふ所の東夷の巣窟なりき。抑々東夷の狀

態たるや、鷙悍強暴にして、相凌ぎ相犯すを事とし、殺戮盜略、唯弱の肉は強の食たり。もとより村に長なく邑に首なく、唯本能のまゝに動く事獸とことならず。其東夷の中、蝦夷最も多く、冬は穴にやどり夏は樔にすみ、毛を衣、血をのみ、男女交り居て父子別なく、山にのぼる事飛禽の如く、草を行く事走獸の如く、箭を頭髮に藏め刀を衣中に佩き、黨類を集めて刼掠を事とし、討てば草にかくれ、追へば山に入る。未だ曾つて皇化に染まざる也。天皇、是に於て、大に討ちてこれを服從せしめんとす。

三二、倭姫命と美夜洲媛

斯くて纒向の朝廷には、東夷征討の議開かれぬ。天皇、群臣を會して、何人に此大任を授く可きかとはかり玉ふ。日本武尊、「われ曩に筑紫を伐てり、此度の役は兄大碓命をこそつかはし玉ふ可きなれ。」と申す。あかる、大碓命、之をきくより愕然として色を失ひ、走りいでゝ草叢の中にかくれ玉ふ。天皇、人をして捕へ來らしめ、その命も絶ゆげにおのゝき玉ふ樣を見そなはし、「汝欲せざらば、強ひてつかはすと云はんや。何ぞ、爾く、未だ敵に對せずして豫め懼るゝ事の甚だしきぞ。」と苦笑し玉ふ。誠に此皇子、日本武尊の御勇氣には似もやらで、おかしき迄に怯懦におはしけるなり。

尊、乃ち慨然として再び起ちたまふ。此時尊おん年已に三十に近く、智勇兼ね備りて天晴大將軍の器なり、尊にして起ちたまふ、東夷の討滅、たゞ掌を翻すが如けんのみ。天皇、よろこび玉ひて詔し玉はく、「朕惟ふに、汝の武勇實に人倫を絶す、形はわが子なれど、まことはこれ神人也、わが朝の光榮、汝を俟つてはじめて輝く、わが天下は即ち汝の天下にして、わが位は即ち汝が位也。われ深く汝による。願くは深謀遠慮、以て敵に對し、輕擧をいましめて自重し自愛せよ。」と。天皇の信賴實にかくの如し。暘ふに、比々羅木八

尋矛を以てす。これ節刀也。

従ふもの、吉備武彦、大伴武日、いづれも當千のつはもの也。また七掬脛と云へるものを膳夫となして、再び遠征の途に上り玉ふ。神將の劍は鞘をはしつて閃めかんとす。東海の風雲とぶ事急なり。

途すがら、伊勢に入りて大神宮を拜し、おん叔母倭姫命に謁し玉ふ。曾て西にその行をおくり玉ひし叔母命、今や又東に行くを送る也。尊は今は丈夫とたけ玉ひぬれど、叔母命は十年の老にいよ〳〵心弱くなりまさりつゝ再會を喜ぶの涙は忽ち訣別の涙と變りて、行手の事かにか〳〵と案じわびさせ玉ひつゝ奉祀せる叢雲劍を授けて身の護となさしめ且つ錦の囊を賜ひ、「もし身に危難あらん時この囊を解け、必らず汝を助く可し。」と敎へ玉ひぬ。尊、叔母命の深き御情を身にしめつゝ、袂を分ちて立出で玉ふ。

それより、途中事もなく尾張に入り玉ひ、國造の館に一夜の勞れを休めたまひしが國造に一人の美しき女あり、名を美夜洲姫と云ふ。ふと見たる尊の、颯爽たる英姿に、乙女の胸の血は湧けり。云へばえの思ひになやむ嬌びすがたを、尊、はたあはれと思ひ玉ひしかど、重任を負ひて遠征の途にある身、有明の月影に歸路のちぎりを約しつゝ、梓弓はりし心の一筋に東を指して打立たせ玉ふ。「恙なくませ、幸くませ、疾く歸りませ。」熟き心もて斯く念じては、いつまでも〳〵其後手を見送りつゝ、媛が袂は果なき涙にしとどなりけり。

三三、草薙の劍と弟橘姫

行き〳〵て駿河の國に至らせ玉ふ。

此國の土賊共、尊の雄々しき狀を見て、その敵す可からざるを知るや、佯り降りてさま〴〵に尊を欵待しつゝ、狩をすとて、尊を廣野の中に誘ひ出しまゐらせ、さて、「此野の中に大沼あり、沼の中に住める神こそ、正に御劍の

双にかゝるべき暴神なれ、御征伐なし玉ひなんや。」と申す。尊、さらばとて、蓬々として丈より高くしげりつゞける黄茅を押分けて野の奥深く入り玉ひしに、賊、風に乗じて四方より火を放つ。黄なる烟黑き烟の渦巻く中を、大蛇の舌に似たる炎は、消ゆるかと見れば現はれ、現るゝかと見れば消えつゝ、幻の影の如く走るよと見る〳〵、一陣二陣、どつと高く燃え上りつ、炎は風を煽り風は炎を煽つて尊の四面、今は全くえん〳〵たる紅炎に包まれぬ。炎の音、風の音、風と炎と相うつて鳴る音、打ちどよめく賊の歡聲と和して、地維今や焼け崩れんとするが如し。眞紅に染まりて燃え迫る炎の中に突立ち玉へる尊、かの叔母命より賜はりし囊を開けば燧石あり、乃ち迎火をかけ、かの御劒を拔き放つてあたりの草を薙ぎかけ玉へば、風向一變、火は却つて賊共の方に襲ひ行く、賊共、周章狼狽して右往左往に逃げまどへるを、炎と共に追蒐けては斬り伏せ屠り伏せ、遂にことゞく打ほろぼし玉ひき。

この御劍、これよりぞ草薙の劍とは申すなる。其あたり焼津の名を負ひて今なほのこれり。

尊、夫より相模に出で玉ひ、舟よそほひして上總に渡らんとしたまふ。相莫洋は聞ゆる荒海也。御船沖つ邊にさしかゝりし時、空俄かに掻き曇り、大洋の彼方より冷たき風來て、波頭白く騒ぎそめぬと思ふほどに、那來の狂飈ぞ一陣又二陣、天末の斷雲を捲いてひよう〳〵と海面を衝き動かす。と見る見る、山の如き大濤、斐々として舞ひ上り崩れ立ち、暗澹たる大天地は唯相拍擊し相怒號する風と浪との領となりぬ。

九天にのぼるかと見れば、九地にくだり、東に飜へるとすれば西に捲かれ、御舟は屢々くつがへりなんとす。尊に拔山の勇はおはせど、此一葉の扁舟をいかにせんや。あはれ、空しく此海底の水屑とはつ可き運命なりし乎。

御船の人々皆顔色なし、舷にすがりておのゝきつゝ、唯神々を祈るのみ也。

時に、妃弟橘姫、決然として尊に申したまふやう、「かく海のあるゝ事、これ海神のたゝり玉ふとおぼし、願はくはわが身を犧牲としてかの海神の荒ぶる御靈を慰めまつらん。君が身こそ尋常の御身ならね、疾く所遣の政遂げて御勳功をたてさせたまへ、かくて常磐に堅磐に榮えませ。さらば也わが脊の君」

かくのたまひつゝ、姫は舷に立ち玉ひぬ。白絶の裳天地の薄明にひるがへつて、屹と荒れたつ海原を見たまひし眞白き顏の、美しくもはた神々しかりし哉。

さねさしの、　さがみの小野に、
燃ゆる火の、　火中に立ちて、
とひし君はも。

君故に捨つる命は惜しからねど、わかれ奉る事ぞ悲しき哀々の情、最後の一瞥に籠めし激切のおもひは、此纒綿の一首となりて胸をほとばしれり。ちかも歌の餘韻も消えぬ間に、姫の身は已に海中に消えける也。

海神も姫の志をかなしとや思ひ玉ひけん、たちまちにして、空はれ、海凪ぎ、御船は事なく上總の海岸につくを得たりき。

姫の海に投じ玉ひしより七日の後、其御櫛波のまに〳〵海濱に漂着せしを、拾ひて御墓をたてしと云ふ。愛ゆへには、百年も短かしとする生命也、ちかも愛故にはかくて捨てぬ、死を以て夫に仕へし姫が愛の、何ぞ夫れけなげにもかなしきや。あはれ、「さねさしの、相模の小野に燃ゆる火の――。」相模の海の波の音に、今はた漂へる此悲歌のしらべをきけ。

三四、『吾妻はや』

尊、上總に入り、又海に浮びて、今の九十九里濱にそうて陸奥の堺に入り

たまへり。時に、御船の舳に日月の光を欺く一大明鏡をかゝげ、尊、矛をとりて颯爽たる英姿を萬里の長風に吹かせて立ちたまひければ、竹の水門に集りて拒ぎ奉らんとせし蝦夷の賊首等、はるかにこれを望み見て、其威勢におち怖れつ、「げに現人神の子こそおはしけれ、あなかしこ、ゆめ手向ひすな。」とて、弓矢を投げ捨てゝ鬚髯むさくるしき蝦の如き顔を俯し連ね、恭しく迎へ奉りぬ。尊、乃ち罪をゆるし玉ひ、尚奥深くわけ入りて、多くの賊をうちしたがへたまふ。其おん丈一丈にあまる端麗の御姿を見奉るや、畏れを知らぬ蠻民共も、ゆへしらぬ靈威に壓せられて、先を爭うて御前に跪きければ、尊双にちぬる事なく、陸奥の國々をうちしたがへ玉ひぬ。宿禰の復命により て知れたる日高見國もかくて大君の御稜威になびき伏したり。

日高見國より、西南常陸の新治筑波を過ぎ、甲斐國に至りまして酒折の宮にやどらせ玉ひき。長途の遠征に疲れし身を床上に横へ、遠く吹き行く風の行衛に思ふ事多くおはしき。倭姫の事、弟橘姫の事、美夜洲姫の事、懷しき哀しき憶出は潮の如く御胸に湧きて、旅愁うたゝ堪えさせ玉ひ難くなりぬ。あはれ、遙々と來しもの哉、旅にすごせし日、已に幾日となりけむ。

にい治、　つく波をすぎて、
いく夜か寢つる。

尊は傍に燭を秉れる翁にかく問ひ玉ふ。

かゞなへて、夜には九夜、
日には十日を。

斯く答へまつりし翁の銀針の如き髯は幽かにゆれたり。尊は萬感胸に往來して、夜もすがら眠り玉はざりき。丈夫豈涙なからんや、尊は實に多情多感の子なりし也。

甲斐より北して武藏上野を轉歴し、西碓井嶺にのぼれば、東南、雲烟微茫

の彼方に相模灘の波の一線白銀色に輝けるが見ゆ。尊は石の如く佇立して身動きもせず、凝然として彼方を見つめ玉へる也。何時迄も〳〵見つめ玉へる也。

「吾妻はや。」

唯一語、胸を絞れる一語なりき。あゝ吾妻はや彼の海の波に沈みき、わが爲に彼の海の波に沈みて逝きゝ、あゝ最愛き吾妻はや。碓井嶺上、實に尊は男泣きに泣き玉へる也。

三五、能褒野のつゆ

夫より尊、信濃、越の地方未だ王化に從はずとなし、道を分ちて吉備武彦を越國に遣はし其地理及人民の順否を監察せしめ、尊は進みて信濃の國に入り玉ふ。此國、地勢頗る峻嶮にして山高く谷幽く、行路の困難云ふ可くもあらず。つぶさに辛苦を嘗め玉ひつゝ、行く〳〵土賊を平定して、武彦と再會し、尊は夫より尾張に出でゝ、美夜洲姫の許をおとづれ玉ひぬ。

尊を見送り參らせてより、姫は朝に夕に物思ふ事繁き身となりき。雨につけ風につけ、いづくの空を夫ぞとも定めがたき人の行衛に、一人心を碎きつつ、此春秋も案じ暮らしてゐたりしが、今、恙も在さで歸り玉ひし尊を見奉りては、なか〳〵に夢ならじかとも疑るゝなりけり。尊、暫らくこゝにおはして、遠征の疲を慰め玉へりしが、さてある可きにあらず、東夷征討の次第を復奏せんとて、又來ん迄の形見にと彼の草薙の劍を止めおき、都を指して歸らせ玉ふ。

あかるに其途次、近江の伊吹山に惡神ありて民を惱ます由聞き玉ひ、乃ち誅し玉はんとて、單身此山中に分け入り玉ひぬ。

路益々けはしく山愈々幽也。進み行く程に牛の如き眞白き猪あり、道を横

切つて去る。これぞ惡神の使ならんと思しけるが、何かあらんとて、其儘進み玉ひしに、天地俄に晦冥となつて礫の如き雹激しく降り來ぬ。怪しやと思し玉ふ程もなく、尊、俄に疫につかれし如く、御心地懵然として、御眼もくらくなりぬ。いかにかしけん、怪き事哉と思しつゝ、麓の方に降り來て、ある泉を掬して飲み玉ひしに、御心地稍冴々しうなりけり。この泉は後に醒が井と云へるものなり。

されど、是より病次第に重らせ玉ひ、足、當蹊斯（桙）の形に三つに曲り玉ひて、遂に御歩行も自由ならぬやうになり玉ひぬ。あはれ、大空も翔りますべき此尊も病故には御杖にすがりてよろめきつゝ行き玉ふ。彼の白き猪は、伊吹の惡神の化れるにて、其時毒氣を吹きかけられ玉ひける也。

斯くて打よろめきつゝ、尾張に出で玉ひしが、姫の許には立寄り玉はず、直ちに伊勢に出で玉ふ。尾津の濱邊に來て見たまへば、曾つて御東征の途次、

其處の松樹の下におき忘れ玉へりし太刀は尚ほ其儘に殘れり。尊感慨にたえさせ玉はず、歌ひ曰はく、

尾張に、　ただに向へる一松あはれ
あはれ一松、　人にありせば衣きせましを、

太刀佩けましを。

夫より能褒野に至りましぬ。尊今は遂に起ち難きを覺悟したまひ、武彦をして先づ歸りて復命せしむ。あはれ、日本武尊、幾年月の櫛風沐雨、具さに征戰の辛苦を嘗めて天晴東夷征討の大任を果たし玉ひ、今や將に歸るに垂んとして、此病に罹らせ玉ふ。いかに夫れ、口惜しく、はたかなしかりけむ。

倭は國のまほらま、たゝなつく、
青垣山こもれる、　倭しうるはし。

都を慕ひてはかく歌ひたまひぬ。又歌ひ曰はく、

命のまけけん人は、　たゝみこも平群の山の、
くま樫が葉を、　髻華にさせ、
この群臣。
命ありて故郷に歸り得る群臣共を、羨ましとのたまはせし也。一面、鬼神をも叱咤し玉はん豪毅の尊、一面、此哀々として呼ぶ兒女の情濃かにおはせし也。

はしけやし、　わが家の方ゆ、
雲ゐ立ち來も。
何等哀切の調ぞや。尊更に尾張なる美夜洲姫を偲びてうたひたまはく、
小女の、床の邊に、わが置きし、
劍太刀、　その太刀はや。
名にし負ふ日本武尊の最後の聲、何ぞしかく一に悲しきや。家を思ひ、故郷を思ひ、はた戀人を思ひ、おもひ悶えつゝ、遂に能褒野の露に消え玉ひぬ。其おん勳の華々しきには似もやらで、其御最後の何ぞしかく、悲しくはたはかなきや。

尊、能褒野に薨ぜさせ玉ひぬとき、天皇哀惜して措かず。厚く葬り弔はしめ玉ふ。時に御墓の中より白鳥飛び出で、一は倭の彈琴原にとび降り、一は河内の古市邑にとび降りければ、各其地に陵を造りぬ。これを白鳥の陵と申す。また彼の美夜洲姫は、尊の薨去をきくや、身も消ゆるばかりに打嘆かせ玉ひけるが、其形見とて殘させ玉へる草薙劍を奉祀して熱田に居玉ひき、これ即ち熱田宮也。

日本武尊の薨後三年、天皇東方を巡幸したまふ。先づ伊勢に幸し、東海に入り、上總、安房等をめぐり玉ひ、再び伊勢にいでゝ還御あらせられしが、此行、尊が遠征の跡を尋ねて、天皇感慨深くおはしたまひき。

其翌年、彦狹島王を以て東山道十五國の都督に任じたまひしが、王、任所に至らずして薨じ玉ひしに、東國の民、王の到りまさぬを悲み、窃に其屍を盗みて上野國に持ち行きて之を葬りしといふにても、いかに其悅服せりしかを知る可し。後御諸別の王に命して、父王の業をつぎて、往いて東國を領せしめ玉ひしが、命令よく行はれて、東方又騷擾なかりき。

西に熊襲を夷げ東に蝦夷を打ちて、王綱の張れる事、未だ曾つて此朝の如きはなかりき。後の詩人歌うて曰く、

纒向の日代の宮は
朝の日の日照る國
夕の日の日かげる國
竹の根の根立る國
木の根の根はふ國

まきさく、檜の御門

三六、成務の御宇

景行天皇についで御位につきたまへるは、第十三代成務天皇也。此朝、名臣武内宿禰を大臣とし、大に制度の整頓をはかりき。諸國に令して、國郡に造長を立て、縣邑に稻置を置き、並に楯矛を賜ひて以て表となし、山河を隔てゝ國縣を分ち、阡陌に從つて邑里を定め、各々其國の有力なる者を其國群の首長に任じ、以て諸國を治めしめしかは、百姓其堵に安んずるを得たりき。

神武天皇の創業につぐに、崇神垂仁兩朝の蘊蓄を以てし、更に、景行天皇、日本武尊によつて著しく外延を擴張せしわが國家は、此朝において内包やゝ整頓の緒につけり。而して溢るゝ迄に充實せる活力は、次代の神功皇后によつて更に海外に向つて一大發展を試みんとする也。紀元實に八百年、わが建

國史こゝに終る。

橿原宮 終

明治四十五年一月十五日印刷
明治四十五年一月二十日發行

日本歴史讀本奥附
定價參拾五錢

大日本國民中學會

編輯所

編輯兼發行者　東京市神田區駿河臺袋町十六番地　河野正義

印刷者　東京市神田區仲猿樂町五番地　佐々木俊一

秀光舍印刷

發行所　東京市神田駿河臺九番　振替東京三千　東京國民書院

橿原宮
不許複製

◉日本歷史讀本第二編豫告

三韓征伐

目下印刷中

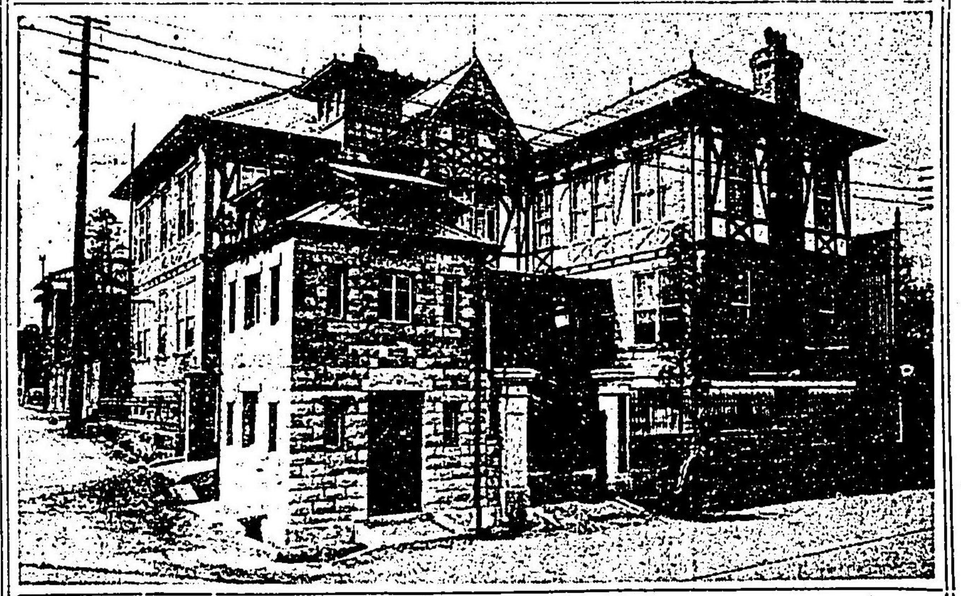
日韓併合は、明治聖代の一大盛事也。而も二千年前、神功皇后の三韓征伐あつて、既にその版域は劃せられたる也。華顏を日本海の潮沫に濕ほし、雲鬟を北大陸の天風に亂して、大和民族海外雄飛の魁をなせし女性將軍の奕々たる神彩を見んと欲するものは、請ふ本篇に就け。輔くるに銀髯蓬々たる老將あり、繼ぐに胎中天皇の經營あり、内は文物忽ちに燦爛として外に國威見る〳〵四海に横溢するに至る。我が民族の世界的發展の蹟實に是に啓く。題して、「三韓征伐」と云ふ、本篇は實に大和民族海外雄飛史也。

發行所　東京神田區駿河臺　東京國民書院

第十六回新學期開講

大日本國民中學會

◉會長　東京市長　尾崎行雄◉



自宅に在りて尋常中學校の全課程を完全に獨習せんとする人の爲めに本會は模範的中學講義錄を發行す正則の組織と懇切の教授と低廉の學費とは他に比を看ざる本會の大特色とする所なり

今回講義錄に根本的大改良を加へ會務を擴張して會員を募る目下第十六回新學期既に開講し入會の最好機は刻々に去らんとす申込は一刻も迅かなれ講義錄見本つき規則申込次第無料進呈す

東京神田駿河臺　電話本局三三〇〇二番　三七〇〇四番　七番

福本日南　小栗風葉
竹越三叉　柳川春葉
國府犀東　五家序文

百日速成 作文獨習書

大日本國民中學會編著

第拾貳版賣切　第拾三版出來!!

製本總クロース金文字入顔美本
定價金壹圓
郵稅金拾貳錢
會員に限り郵稅共に八拾八錢

▲報知新聞評　專門の教育家が苦心の餘に成れるものだけありて、教授の方法最も嶄新也、之によつて學ばゞ一日僅に數時間の講習、積んで百日の後には文章熟達の境に入る事難からざる可し。

▲萬朝報評　初學者の獨習書として如何にも適當の物と思はれる。內容は獨習の期を三つに分ち第一期には手ほどきになる事を敎へ、第二期に至つて文法に入り、第三期になつて始めて修辭の法則を說いたのは、仲々巧みな編み方である。評者は文の初學者に恰好の物として此書を推薦する。

作文家の福音

★

▲毎日新聞評　百日を以て速成せしむると云ふ新案にて、從來の作文書の如く空疎なる理窟に陷らず、說くところ最も實用的也。此書に就いて學ばゞ短日月の間に文章各體の作法に通じて、叙事抒情議論等の諸文を草する助となること多からむ。

▲朝日新聞評　此書の如き實用を主とせるは稀に看る所にして、百日速成といへる新案により平易に適切に諄々として文章各體の作法を說けり。講述平易にして文字興味ある學生必讀の書也。

本書購讀者に限り文章無料添刪の特典を與ふ

發行所　東京市神田區駿河臺　東京國民書院　振替東京三千九番

◀大日本國民中學會編▶

最新國民讀本

前後二冊
定價各貳拾五錢
郵稅各六錢
本會會員に限り郵稅を要せず

小學校卒業程度の補習讀本出づ

小學校の義務教育を終へたる時、何人も其智識の餘りに淺く、其見聞の餘りに狹きを覺ゆべし。之を深からしめ、之を廣からしめ、以て社會有用の人物たらしむるものは即ち本書也。本書は實に專門教育大家が一歲有餘の勞を重ねて漸く成りしもの、廣く中等諸學科に涉りて緊要の智識を撮み、一般國民の知悉すべき事項を網羅して剩す所なし。

中學生の興味多き參考讀本なり

其目的より云へば、奈何なる人も讀むべき國民讀本にして、其程度より云へば、小學校卒業後の補習讀本也。故に讀み易く解し易からしめんが爲め、文章の簡明を主とし、興味の多きを期せり。今や補習學校は爭うて本書を其教科書に採用しつゝあるが、一般小學校卒業生諸君の之を机上の師友として日夕親しまれんことは本會の切に望む所也。

發行所　東京市神田區駿河臺　東京國民書院　振替東京三千九番

血湧き肉躍る死士の傳記也

近藤勇

報知新聞記者 鹿嶋淑男著

大好評 初版賣切 再版出來!!

幕末の歴史を彩れる新選組の隊長
男子中の眞男子たる近藤勇の傳記
青年諸君に薦むべき剛健なる讀物

近藤勇！　その名を聞くもの、誰か、虎徹の長刀を横へて比叡颪寒き京の都を濶歩せし意氣虹の如き關東武士の面影を髣髴し來らざらんや。勤王と佐幕と攘夷と、調和し得べからざる此三つの主義を抱きて自ら悶へ、遂に已むに已まれぬ武士の意氣地は、徳川氏の運命と終始せしめ了ばんぬ。人を斬ることそも幾千ぞ。薩の健兒にも長の志士にも、彼の名は唯恐怖なりき。猛勇の中に機智あり、慓悍の中に熱血あり、彼の生涯は不祥なる血の歴史にして、亦麗はしき任俠の歴史也。あゝ近藤勇！　幕末の天下に鬼神の如くに怖れられたる新選組の隊長近藤勇！　その面目と眞生涯とは此一卷の中に收め盡くされたり。武士的讀物に渦せる剛健なる青年諸君、何ぞ迅かに來りて此書を繙かざる。

新刊 來出 洋裝美本
定價 五拾錢 郵稅六錢
◀ 會員に限り郵稅共五拾錢 ▶

東京國民書院
振替東京三千九番

267
499